新見公立大学紀要　第42巻
pp. 1－21, 2021

論稿

鹿児島県甑島のトシドン伝説

原田　信之[1)]*

1）新見公立大学健康科学部看護学科

（2021年9月22日受付、11月17日受理）

鹿児島県の下甑島には、トシドン伝説が各地に伝承されている。下甑島のトシドン（年殿）は「年神様」で、天から首切れ馬に乗って集落近くの山や瀬に下りてきて観察し、大晦日の夜に来訪して子どもたちに「年餅」と「年」をくれる。実体として来訪するトシドンの姿は、古くは顔を手ぬぐいのようなもので隠したり蓑のようなものを着て訪れ、後に手作りの面のようなものを作って顔を隠すようになり、さらには鬼の面のようなものを購入して保存会などで管理するなど、時代と共に変化していったらしい。戦後一時中断していた時期があったそうだが大きな教育的効果があるとして復活した。上甑島にはかつてトシトイジイサンの伝承があったとされる。また、明治二十年以前の下甑島からの移住者が伝えた来訪神名に、種子島ではトシトイドン（年取殿）、屋久島ではトシジイサン（年爺さん）、トシトイドン（年取殿）など、上甑島の「トシトイジイサン（年取爺さん）」系の呼称があったらしいことがうかがえる。トシドンとトシトイジイサンのどちらが古い形であったのかはわからないが、両者に多くの共通項があることから考えると、古い時代には両者とも年神様の来訪を「説明」していたが、いつの頃か下甑島で「実体（トシドン）」が仮装して来訪するように変更される経過をたどったと推定することも可能かもしれない。

（キーワード）祭事説明伝説、甑島、来訪神、トシドン、トシトイジイサン

はじめに

上甑（こしき）島、中甑島、下甑島の有人三島と無人の小属島群からなる鹿児島県の甑列島（甑島列島、甑島ともよぶ）は、かつては薩摩郡里村（上甑島東部）、上甑村（上甑島西部・中甑島）、鹿島村（下甑島北部）、下甑村（下甑島南部）の四村に分かれていたが、平成十六年（二〇〇四）に合併して薩摩川内市の一部となった。上甑島と中甑島間は無人の中島を挟んで甑大明神橋と鹿の子大橋で結ばれ、中甑島と下甑島間は令和二年（二〇二〇）八月に甑大橋が架橋されて上甑島・中甑島・下甑島の有人三島が橋でつながり利便性が増した。これらの島々は鹿児島文化圏に属するが、琉球文化の影響を受けているとされる。

甑列島はカノコユリの自生地として有名で、毎年七月下旬から八月頃にはあちこちで奇麗な花を咲かせる。カノコユリは貴重な観光資源の一つとなっており、薩摩川内市の市花に制定されている（平成十七年二月十三日制定）。

甑列島には、島名説明伝説の「甑島（甑形の岩に由来）」、岬名説明伝説の「唐船が艫（遣唐船の船尾部分〈艫〉が漂着したことに由来）」、石名説明伝説の「トシドン石（トシドンが下りる石）」「神籠石（神が籠もる石）」「手掛石（死者が手をかけて通る石）」、浜名説明伝説の「長目の浜（眺めが良い浜）」、池名説明伝説の「海鼠池（海鼠がいる）」「貝池（貝がいる）」、瀬名説明伝説の「十六人瀬（十六人が遭難）」、穴名説明伝説の「八艘穴（船が八艘入る）」など、多様な自然説明伝説が伝承されている[1)]。

下甑島には大晦日の夜に行われる伝統行事「トシドン」が伝承されている。トシドンは、昭和五十二（一九七七）年五月十七日に国指定重要無形民俗文化財に指定され[2)]、平成三十（二〇一八）年にユネスコの無形文化遺産に登録された。ユネスコの無形文化遺産に登録された「来訪神：仮面・仮装の神々」では、「甑島のトシドン（鹿児島県薩摩川内市）」に加え、「男鹿のナマハゲ（秋田県男鹿市）」、「能登のアマメハギ（石川県輪島市・能登町）」、「宮古島のパーントゥ（沖縄県宮古島市）」、「遊佐の小正月行事（山形県遊佐町）」、「米川の水かぶり（宮城県登米市）」、「見島のカセドリ（佐賀県佐賀市）」、「吉浜のスネカ（岩手県大船渡市）」、「薩摩硫黄島のメンドン（鹿児島県三島村）」、「悪石島のボゼ（鹿児島県十島村）」が拡張登録された[3)]。

トシドンは仮面で出現する来訪神で下甑島に伝承されているが、なぜか上甑島には伝承されていない。日本本土のみならず、南西諸島各地に伝承されている来訪神との関係が注目される。

本稿は、現地で採集した口承資料などの検討を通して、甑島に伝えられてきたトシドン伝説とトシドンをめぐる

*連絡先：原田信之　新見公立大学健康科学部看護学科　718-8585　新見市西方1263-2

諸問題について考察することを目的とする。

Ⅰ　トシドン復活と文化財指定の経緯

下甑島のトシドンでは、鼻の長い恐ろしい仮面をしたトシドンが、三～九歳の幼児のいる家庭を訪問する。トシドンは子どもたちの健やかな成長と幸福を願う「年の神様」で、家庭での幼児のしつけをよくするために行われてきた。現在、下甑島には、港トシドン保存会（手打地区）、麓トシドン保存会（手打地区）、本町トシドン保存会（手打地区）、片野浦トシドン保存会（片野浦地区）、瀬々野浦トシドン保存会（瀬々野浦地区）、青瀬トシドン保存会（青瀬地区）という六つの保存会がありトシドン行事の保存に努めている[4]。トシドンの伝承は、手打地区、片野浦地区、瀬々野浦地区でそれぞれ少しずつ異なっている。

下甑島のトシドンがいつから行われているのかについては史料がないのでよくわからないが、明治十九（一八八六）年～二十（一八八七）年に下甑島から種子島や屋久島に移住した人たちがトシドンを継承していることから[5]、明治二十年頃の下甑島の人々が確実にトシドンを行っていたことがわかる。このことから、少なくとも江戸時代末期には下甑島でトシドンが行われていたと判断して良いように思われる。

下甑島のトシドンは、第二次世界大戦中に一時中断していた時期があり、戦後復活したという。次に、復活した時の状況についての貴重な語りを示す。

〈事例１〉「トシドン戦後復活の経緯」

これあの、終戦当時、私が復員してきた時に、「トシドンちゅうのは子どものしつけだから、どうしても復活したい」と言うていとこの鳥居ていう兄貴に言ったら、「やろうじゃないか」て二人で。段ボールのお面を作ったり、へえから自分たちでこう編んで、面は段ボールにシュロ（棕櫚）の皮を付けたりソテツ（蘇鉄）の葉を使ってまあトシドンの面を作ってから、やりよったところが、強制的だと。いわゆるファッショだと。いろいろ言われましたけど、これは子どもたちの将来を願っての、昔からの流れのしつけだと。いわゆる軍国主義とか、やれ強制的なしつけだということはあり得んちゅうて。あんたがた他のことで、いろいろされるのはいいんだけど、これだけは絶対、下甑島のトシドンだけは間違いなく子どものしつけであり、特に麓はトシドンのしつけ。八朔行事、十五夜行事ちゅうて、三大行事をやってるんです。これはもう、士族の流れで。トシドンに自分で受けて、少年青年になったらトシドンの実行して、そして年取ったら、青年子どもたちにしつけを老人たちがする、三つの流れがあるということでして。へでまあおかげさんで、国の指定になって、そしたら、ユネスコに、国連教育科学文化機関に平成二十一年九月三十日に決定し、ユネスコの無形文化財、世界に一つしかないトシドンになったんです。[6]

〈事例１〉は手打麓地区の橋口義民氏の語りである。橋口氏は手打のトシドンの継承と発展に長年にわたって大きな役割を果たしてきた人である。第二次世界大戦後、橋口氏が復員してきた時には、手打のトシドンは行われていなかったそうで、氏はいとこの鳥居氏と二人で段ボールにシュロの皮やソテツの葉を使ってトシドンの面を作って復活させたそうである。しかし、戦後の風潮から一部の人々が、強制的だ、ファッショだと復活に反対したというが、下甑島のトシドンだけは間違いなく子どものしつけであり、軍国主義とか強制的なしつけだということはあり得ないと主張したという。結局、手打の人々の総意はトシドン復活に向かい、八朔行事や十五夜行事とともに三大行事の一つとして現在も行われている[7]。そして、国指定重要無形民俗文化財、ユネスコ無形文化遺産になったということであった。

南西諸島各地を調査していると、伝統行事が廃絶されたり、廃絶されそうになったという話を良く聞く。その時期は、明治維新後と第二次世界大戦前後の混乱期のことと語られる場合が多いようである。

筆者原田が実際に聞いた伝統行事廃絶に関するものとしては、伊平屋列島の事例がある。沖縄県の伊平屋列島には伊平屋島・野甫島（伊平屋村）、伊是名島（伊是名村）という有人島三島があり、多くの祭事が伝承されている。伊平屋島の田名集落では、明治十二（一八七七）年の廃藩置県に伴って旧制度が廃止状態となり、田名に伝えられてきた「ウンジャミ」という行事も明治三十五年に復活するまで二十年近く中断されたらしい[8]。また、この伊平屋列島有人三島の伊平屋島・野甫島・伊是名島すべてにかつては「ウンジャミ」「シヌグ」という行事が伝承されていたが、第二次世界大戦後、伊平屋村議会で生活改善運動として拝所の統合とあらゆる儀式の材料などの廃止が決まり、ウンジャミ・シヌグも廃止された。伊平屋村各集落のうち、田名地区では廃止後種々都合の悪いことが生じて復活し、我喜屋地区も不幸があって復活し、島尻地区は他地区の様子を見て廃止を中止し、野甫地区では不都合な出来事が起きなかったため廃止されたまま今に至るということであった[9]。

南西諸島各地の事例では、「都合の悪いこと」「不幸」の判定にユタなどのシャーマンが介入することが多い[10]。伊平屋列島の事例においても、「都合の悪いこと」や「不幸」があったのでと説明されていることから、廃絶されかけた祭事の復活をめぐってシャーマンの介入があったとみられる。しかし、甑島のトシドンの復活にはシャーマンの介入はなく、地域の伝統行事への強い誇りが復活への大きな力となったようである。

〈事例１〉の最後で語られているのは、伝統継承の立場が個人の生涯で変化することについての説明である。自分

が子どもの頃はトシドンにしつけを受ける立場で、少年青年になったらトシドンを実行する立場になり、年を取ったら青年や子どもたちに老人の立場でしつけをするという、三つの流れがあると述べている。

各地の祭事が重要無形民俗文化財に指定される場合、それぞれに何らかのきっかけとなる出来事があるわけであるが、甑島のトシドンにはどのようなきっかけや経緯があったのであろうか。次に、トシドンが国指定重要無形民俗文化財に指定される経緯についての語りを示す。

〈事例２〉「トシドン文化財指定の経緯」

トシドンといやぁですね、戦前いわゆる戦争の前、いつ頃始まったかはわからんです。それが、私たちは大正十五年生まれですけど、昭和の二、三年頃から、「トシドンは悪いことすればしつけするよ」っちて聞かされとって、そいで、手打（てうち）集落でも、麓（ふもと）集落が主体だったんです。そしてこっちが港（みなと）集落、こちらが農村。今では本町（もとまち）――本町（ほんまち）って書きますけど――。三部落が手打にあるんですよ。せえで、その集落集落ごとに、トシドンのしつけの方法、いろんな、トシドンの格好をなす面とか、例えば着ているものは、違ってくるんです。

ところが、（昭和）四十八年に、東京から、今作家してらっしゃる、その当時はＮＨＫのアナウンサー下重暁子（しもじゅうあきこ）という人が、訪ねて来まして、トシドンのことについて、「実際どういうしつけをされるか」て聞かれたんで、本当は、来られた月が十二月二十八日だったんです。そしてトシドンは、十二月三十一日の例えば午後六時から八時ぐらいに、対象になる四歳児から六歳児の、目が覚めているうちに、夕方せんと、もう八時過ぎになれば、寝込んでしまうわけ。ほで「早い子どもたちはもう、夕ご飯食べながらこうやって寝てしまうから、だいたい六時から八時の間ぐらいに出現しますので、来られたのはちょっと早いから、三十一日まで手打の旅館に泊まっとってください」って言って。三十一日の来る間に、この、東京のＮＨＫ関係で来られたカメラマンやらもおったもんだから、この対象児になる、対象を受ける、つきを受ける子どもたちのおる家を、お願いして、三十一日の午後六時から八時半ぐらい、子どもたち四人を集めて、下重さんも交えて、まあ、しつけをやったわけですよ。そのしつけをした、いわゆるカメラで収められたのを、東京に持って行って、東京でちょっと流されたらしいんですよ。そしたら文化庁が目に留めて、私んところに連絡が来たから、「トシドンはどういうことか」ということで、「どんなことか」というて電話で言うわけ。「来てください。実際、聞いて見てください」て。

そしたら、天野（あまの）ていう次官、文化庁の天野て――天野（てんの）て書く――、その先生たちが来て。実際、麓のしつけの状態を話ししたところが、「これは、国の指定にしていい」と、ゆうことがだんだん決まってきて、そいで手打集落の麓の保存会、港の保存会、本町の保存会の三つに呼びかけまして、公民館代表で集まって。そしたら、たった三つのあれではいけないと、他に片野浦、瀬々野浦、青瀬長浜もあるから、一応これは文化財審議委員会で検討しようてことで寄ってもらって、決まったのが手打の三つの集落と、片野浦と瀬々野浦と青瀬。ただし、長浜はその当時はあんまりやっていなかったので、もうできないということで、六つの保存会ができたわけ。

そして、東京の、民俗映像株式会社の、いわゆる、民俗学会に関係した会社が来て、そして、国が百万、県が五十万、それから下甑村が五十万。二百万で、一応映画化する。フィルムに収めて、ちゅうことになって、実施した時に、ＮＨＫがさらにちょっと聞いたんですよ。こう大々的にやり始めると。ＮＨＫから私に電話が来て、「トシドンの民俗学監修のいわゆるフィルムに収めることになってるそうですが、ＮＨＫも一応全国放送したいから、加入さしてくれんか」て来たから、「いつでもいいですけど、条件としては、子どもは先言ったように六時から八時に関係者の家にしつけをせんといかんので、ＮＨＫはどういうふうにして取材しますか」て言うたら、「できれば、『ゆく年くる年』の、時間が終わってから」て言うから、「いやできません。子どもたちは寝るんですよ。もう夕ご飯食べながら寝る子どももおるし、だからできません」て言ったら、「どうかでけんか」って言って。「でけんのはでけん」てやったんですけど。まあいろいろ文化財審議委員の連中と、「せめて全国放送にすれば、いいんだが。子どもを、寝らないうちに、一応早く寝かして、十一時頃、『ゆく年くる年』が終わる頃起こして、やろうじゃないか」て、いろいろ手を打ったんですけど。それじゃ、一つの家に決定しようと言うてそこにまあ、六、七人子どもを集めてやろうと。そしたら、不思議なもんで、晴れて居眠りして、もう六時七時頃寝る子どもたちが、目を開けて、『ゆく年くる年』まで起きとった。そいで、（準備に）来て、天井のとっから、提灯やらあれに設定して、ちゃんとあのう、つけることができた。そいでまあ、どうにか全国放送やった。ゆうのがだんだんだんだん、知れ渡りまして、文化庁が国の指定、（昭和）五十何年でしたかなぁ。五十一年に調査してから、五十二年五月に国の指定、（重要）無形民俗文化財として指定されまして、せえで、現在までやってるんですけど。[11]

〈事例２〉は甑島のトシドンが国指定重要無形民俗文化財に指定されるまでの経緯に関する語りである。トシドンがどのように全国に知られる存在になって行ったかがよくわかる貴重なものとなっている。この事例も手打麓地区の橋口義民氏が語ってくれた。最初にトシドンがいつ頃始まったかはわからないこと、手打集落のなかにある麓、港、本町という三地区ごとにトシドンのしつけの方法、面、着ているものが違っていることについて述べ、次にトシドンが注目されるようになった契機や著名になってゆく経緯について詳しく説明している。その経緯を時間軸に沿って

簡略にまとめてみると、以下のようになる（誤認を一部修正）。

・昭和四十八年頃に（元）ＮＨＫのアナウンサー下重暁子さんがトシドンの取材に東京から訪ねて来た。

・その時東京のＮＨＫ関係者がトシドンをカメラに収めてそれが東京で少し流された。

・それを文化庁が目に留めて橋口氏に電話をかけてきたので実際に見に来てくださいと答えた。

・昭和五十一年に文化庁から調査に来て国指定にする方向がだんだん決まってきた。

・文化財審議委員会で検討して手打の三集落に片野浦・瀬々野浦・青瀬を加えて六つの保存会ができた。

・東京の民俗学映像に関係した会社が来て国が百万円、県が五十万円、下甑村が五十万円出してフィルムに収めることになった。

・それを知ったＮＨＫが橋口氏に電話をかけてきてＮＨＫも全国放送したいから取材させてくれと依頼してきた。

・それからだんだん知れ渡ってトシドンは昭和五十二年五月に国指定重要無形民俗文化財として指定された。

・ＮＨＫ『ゆく年くる年』でトシドンが放映された。その際、放映時間に合わせてほしいと申し入れてきたので子どもを早く寝かして時間を調整して全国放送できた（時期誤認。放映は昭和五十三年なので文化財指定後）。

〈事例２〉の語りから、昭和四十年代[12]に元ＮＨＫのアナウンサーで作家の下重暁子氏がトシドンの取材に来てＮＨＫで放映されたことがきっかけとなり、文化庁がトシドンの調査に来て、昭和五十二年に国指定重要無形民俗文化財として指定され、ＮＨＫの『ゆく年くる年』[13]の全国放送からさらに有名になったという経緯がわかる。つまり、甑島のトシドンの場合、文化財指定へと動きだした大きなきっかけは下重暁子氏の取材とＮＨＫでの放映だったようである。

なお、文化庁のトシドン調査については、『下甑村郷土誌』に「昭和五十一年九月二十一日文化庁天野武士調査官、県教育庁文化課諏訪昭千代研究員来島、トシドン行事調査」[14]と記されている。

甑島のトシドンが有名になった契機の一つに、元ＮＨＫのアナウンサーで作家の下重暁子氏の来島があったようであるが、著名人がきっかけとなってその地の祭事が有名になることは時々ある。例えば、トシドンとともにユネスコの無形文化遺産に登録されたトカラ列島悪石島（鹿児島県十島村）の来訪神ボゼは、某年夏に石原慎太郎氏がヨットで寄港して見せてもらえないかと頼んだが、祭事の時ではないのでと断られたことがあったそうである[15]。この、石原慎太郎氏とボゼのエピソードが、悪石島のボゼが全国に知られるようになったきっかけの一つとなったらしい。筆者がトカラ列島を調査している時、悪石島以外の島でも石原慎太郎氏とボゼの話を何回か聞いたので、やはり著名人との何らかの関わりが祭事の有名化に少なからず影響を与えるらしいことがわかる。

Ⅱ　瀬々野浦・片野浦のトシドン

甑列島の有人三島は、上甑島、中甑島、下甑島であるが、トシドンが伝承されているのは下甑島だけである。前節で、明治十九（一八八六）年～明治二十年に下甑島から種子島に移住した人たちがトシドンを継承していることから、明治二十年頃にはトシドンが確実に下甑島で行われており、少なくとも江戸時代末期にはトシドンが下甑島で行われていたとみられることを述べた。古い記録がないため、トシドンがいつ頃からどのような内容で行われてきたのかは不詳であるが、幸いなことに、昭和八年の調査記録が残っている。

昭和八年一月、桜田勝徳氏は上甑島、中甑島、下甑島へ渡って聞き取り調査を行い、「甑島遊記」[16]を執筆した。その中に、下甑島瀬々野浦のトシドンについての記述がある。大変貴重な記録なので、次に引用する（便宜的にＡＢＣの符号と傍線を付した）。

◆「甑島遊記（五）」昭和八年一月十二日の条

Ａ　瀬々野浦は不思議な話の多い所である。（中略）だから、いろいろ古風な慣習も沢山に残つているが、中でも驚いたのは年殿の行事であつた。そこで年殿に関する行事や言伝えを次記してみよう。

年ドンの行事は年取りの夜行われるが、それに先立つて、その夕方にモウソウダシヤレということが行われるから、それをまず記そう。この夕方子供たちは長さ三尺ばかりの竹の棒を持つて婦人連を突いて廻る行事がある（。）男の子たちは娘たちが用いるハデなモスの帯などで鉢巻をし、

モウソウ　ダシャレ
出さんというと垣も壁もたまらんぞ

という脅し文句めいた唄をうたつて突く。これは妊婦や嫁に対する孕め棒のような行事かもしれないが、ここでも正月十四日には二三尺の樫の棒で削り掛けを作り、はらみ出せをやつているのであるから、モウソウダシャレはまた別の意味をもつものであつたのではないか。とに角子供はこれをやつて家に帰り、夕飯をたべてしもうとトシドンの来るのを待つている。

Ｂ　トシドンは首のない馬を牽いて鈴を鳴らして、この夜各戸を訪れると言い伝えている。そこでトシドンの役目を勤めるものは手に鉦を鳴らして門口で馬の啼く真似をして家の中に入つてくる。トシドンの服装は各人いろいろであるが、絹の極く良い着物を着、昔は籠を被つたというが、今は仮面をかぶるものもいる。そういうトシドンが子供のある家の中に入つて行く

と、まず子供に向つて

トシトシ子供は何人か

と話かける。子供はこれに対し容易に返事をせぬが是非とも子供自身に何人かを答えさせる。するとトシドンは

俺はいまミツの国からやつて来た

などと頓智の良いことを言いながら、次第に平常親の言うことをきかぬ子供たちの行為をたしなめる。そうして

泣かぬようにしろ、母親の言う事をきけ言うことをきかぬと、俺はいつでもサイヘエが松から見張つているから、来年は年玉をやらぬぞ、言うことをきけ

と十分に子供を脅して、良い子になると約束をさせ、帰り際に、おみやげだと言つて、子供たちに年玉の餅を渡して、出て行く。これがトシドンの行事である。

そこで親たちは年末になると、自分の家にトシドンになつて来てくれる人を頼み、餅搗きの日には子供たちに一つづつ渡す年玉の餅を作つて、トシドンにそれを渡しておくのである。

所でサイヘエが松という松は瀬々野浦の背後の岡の上にある。そうしてこの松の傍にはトシドン石という石がある由であり、年取り行事と関係のある場所であつたろうと思われるが、現在は何の行事もなく言い伝えもない（。）唯、ここには次のような怪異な話が残つているだけである。

C　昔サイヘエが松の傍に一軒の家があつた。毎年師走廿九日の晩になると見馴れぬドテラを着た大男が何処からともなくやつて来て、この家の横座にすわり込む。それが数年間続いたので噂が高くなり、手打の手妻（でづま）ものがこれを聞きつけて討ち取つてしまおうと計つた（。）そこで大男に茶を出す真似をして茶釜を覆へし、その灰かぐらに驚いている所を、手打の者が抜きうちに切つて捨てた。以後、この家の夫婦は忽ち盲になり、やがて家は絶えた。そうして今でもこの辺には家が建たぬと言われている。[17]

ここのＡＢＣの引用部分は、桜田勝徳氏が昭和八（一九三三）年一月十二日に下甑島の瀬々野浦地区で聞き取り調査をしたもののうち、トシドンに関係する部分である（桜田氏は「トシドン」について「年殿」「年ドン」とも表記）。

Ａ部分は、十二月三十一日の夕方に行われていた「モウソウダシャレ」（「シヤ」は拗音の「シャ」）という行事について述べている。この「モウソウダシャレ」は、トシドン前の夕方に行われ、ハデな鉢巻きをした子どもたちが長さ三尺（約一メートル）くらいの竹の棒を持って、「モウソウ　ダシャレ　出さんというと垣も壁もたまらんぞ」という脅し文句めいた唄をうたい、女性たちを突いて回る行事だという。下甑島ではこの行事に類似した「はらみ出せ」行事も正月十四日に行われているから、「モウソウダシャレはまた別の意味をもつものであつたのではないか」と桜田氏は述べている。この「はらみ出せ」行事は上甑島でも正月十四日に行われていたようで、桜田氏は「この正月十四日には十四歳を頭、十三歳を小頭とする子供連が顔に紅を塗り孕み棒というのを持つて／ハーダメダーセハーダメダーセ／出さぬと垣も壁も　残らんどおう／と囃したて、嫁女を出させて前後から孕み棒でつついた。」[18]と記している（昭和八年一月八日、上甑島の小島地区での聞き取り）。

つまり、桜田氏が調査した昭和八年時には、上甑島では正月十四日に「はらみ出せ」が行われ、下甑島では正月十四日に「はらみ出せ」、加えて大晦日のトシドン前に「モウソウダシャレ」が行われていたことがわかる。下甑島の「はらみ出せ」について『下甑村郷土誌』に「はらみ節句（新暦一月十四日）／若者たちが、まだ子供のいない若夫婦の家を回り、たらの木で作った「はらめんぼう」で、「おかた出せ、よめじょ出せ、出さんというとなべもかまもたまらんど」とはやすながら、若夫婦に子供ができるのを願ったが大正の初期までで終わりを告げた」[19]と記されていることから、大正初期には行われなくなっていたことがわかる。

「モウソウダシャレ」の竹の棒と、「はらみ出せ」の孕み棒は、「祝い棒」と称される、小正月を中心に用いる祝い木で、この祝い棒を用いる行事は、「農作物の豊作や子孫繁栄のための女性の多産などを願ったものであり、この棒に豊饒の呪力を認めた習俗」[20]とされる。下甑島では正月十四日に「はらみ出せ」、大晦日に「モウソウダシャレ」が行われていたことについて、『改訂綜合日本民俗語彙』「モウソウダシャレ」の項は「小正月の呪法が、大正月の方へ移つていき、また変ろうとしているのである」[21]と述べている。現在の下甑島では、正月十四日の「はらみ出せ」も大晦日の「モウソウダシャレ」も行われていない。

Ｂ部分は、昭和八年に聞き取り調査された瀬々野浦地区のトシドンについての報告となっている。簡略にまとめると、以下のようになる。

トシドンは首のない馬をひき、鈴を鳴らして各戸を訪れる。トシドン役を勤めるものは鉦を鳴らして門口で馬のなくマネをして家の中に入る。トシドンの服装は各人いろいろで、絹の良い着物を着て昔は籠をかぶったというが、今は仮面をかぶるものもいる。トシドンが子どものいる家に入り子どもに「トシトシ子供は何人か」と話かけ、子ども自身に何人かを答えさせる。トシドンは平常親の言うことをきかない子どもたちの行為をたしなめる。母親の言うことを聞け、俺はいつでも「サイヘエが松」から見張っているから来年は年玉をやらないぞと脅して良い子になると約束させ、帰り際におみやげだと言って年玉の餅を渡して出て行く。親たちはトシドンになって来てくれる人を頼

み、子どもたちに渡す年玉の餅を作ってトシドンに渡しておく。

この部分の記述から、昭和八年時の瀬々野浦地区のトシドンの内容は、現在下甑島各地で行われているトシドンの内容と大差がないことがわかる。Ｂ部分で注目されるのが、末尾にある「サイヘエが松」と「トシドン石」についての説明である。ここでは、「サイヘエが松」という松は瀬々野浦の背後の岡の上にあり、その松の傍に「トシドン石」という石があるが、現在は何の行事もなく言い伝えもないと述べている。現在の瀬々野浦地区で調査すると、トシドンはサヘエ松（左平松、サヘエガ松）に下りてきてトシドン石の上から村中を観察する、サエ川に下りてきてサヘエ松から村中を観察する、など話者によって内容に微妙な違いがあった。位置としては、サヘエ松のすぐ上に「トシドン石」があり、そこから瀬々野浦の集落が見渡せる場所となっている。

Ｃ部分では、昔サイヘエが松にあった一軒の家にまつわる怪異譚が紹介されている。昔サイヘエが松の傍に一軒の家があり、毎年師走二十九日の晩に大男がやって来て家の横座にすわり込むことが数年間続いたので、手打の腕利きがこれを聞きつけて討ち取った。以後、この家の夫婦はたちまち盲目になり、やがて家が絶え、今でもこの辺には家が建たないという。

「手打の者が抜きうちに切つて捨てた」という内容から、この話は江戸時代にあった事件として伝承されているようである。昔、サヘエという人物がサイヘエが松のところに住んでおり、その家でこのような事件があったという伝説である。この伝説に関しては、中沢新一氏が「両義性のテキスト」として論じているが[22]、あくまでも瀬々野浦の「サイヘエが松」の傍にあった家での怪異譚として伝承された伝説であり、下甑島各地に伝承されているトシドンの本質とは別の問題といえよう。

トシドンは、かつては下甑島全域に伝承されていたようである。小野重朗氏は「大晦日にトシドンのくる部落は、下甑村と鹿島村の全部落で、上甑村と里村では見られない」[23]と述べている。また、下野敏見氏は「トシドンは、甑島の南部、藺牟田村と下甑村の各村に出現する。村落を示すと、藺牟田村の藺牟田、小村、下甑村の芦浜、青瀬、瀬々野浦、岡、浜田、本町、麓、港など。これらの村落では、終戦前まではトシドン行事をやっていたが、戦後大方すたれ、わずかに小村、芦浜、岡、麓に伝承されている。しかし、近年、本町、港などのように復活する村落も見られる」と述べ、「甑島の内侍舞とトシドンの分布図」に「トシドン出現」の集落名として、旧鹿島村地域では鹿島（藺牟田ヵ）、小村（小牟田ヵ）、旧下甑村地域では芦浜、内川内、長浜、瀬々の浦、青瀬、瀬尾、岡、浜田、麓、港、本町に印を付けている[24]。これらのうち、鹿島は藺牟田、小村は小牟田とみられ、岡と浜田は片野浦地区、麓と港と本町は手打地区の集落である。なお、国指定重要無形民俗文化財に指定されている地区は、旧下甑村内の集落のみで、旧鹿島村の集落はそのなかに入っていないが、その理由は、昭和五十二年にトシドンが国指定重要無形民俗文化財に指定される時、旧下甑村は申請したが、旧鹿島村は「単純に申請しなかっただけ」であるという[25]。

では、下甑島の各地域のトシドン伝承について、筆者が聞き取り調査した地区の事例を示すこととする。

まず、桜田氏が調査した瀬々野浦（西山）地区のトシドンは、現在どのように伝承されているかをみてみる（傍線を付した）。瀬々野浦には瀬々野浦トシドン保存会がある。

〈事例３〉「瀬々野浦のトシドン様」

親が、餅をつくわけね。白い、大きな餅を持って、準備して。へで、結局、年神様なんですよね。へで、あそこにトシドン石ていうのがあるんですが、そこで、そのトシドン様は、そこで、子どもたちの行いを、見てると。で、良いこと、悪いこと、全部知ってて、その三十一日の晩に――年の晩ちゅうんです、うちはね。年の晩ちゅうのが大晦日の日に――、下りてきて、「あなたはこういう、良いことをした」と。へで、「また、こういういけないことも、やんちゃなこともやった」と。そこらへんはね、前もって、親は、トシドン様に教えるわけ。まあ、コミュニティである時は、その前に、教えてくれるんですよ、「こういうことを言うてくれ」と。「諭してくれ」と。「なかなか言うこと聞かんからうちの子どもは」、ていうことで、あらかじめ教えて。

そして、ここのトシドンは、首がない馬に乗ってくるちゅうんですね。首ひちぎ馬。ほいで、どんどんどんどん、ヒヒヒーンちゅうたり、馬の鳴き声したり。首がないのになんで。頭がないわけでしょ。首がない馬に乗ってくるということで、そうすると、ヒヒヒンヒンという声も、こう、どんどん。まあうちなんかはこっちから上がらせますんで。なんで、トシドン様は、首のない馬に乗ってくるのにヒヒヒンて鳴くのかなっちって、また不思議な面もあるんだけれども。そんな話ですね、ここのトシドンは。

で、そこのトシドン石っていう所に、サヘエガ松っていうんですよね。そこも行けるんだけど。大きな石。そのトシドン石からは、大きな石なんだけれども、その岩から、石の割れ目からこう、米のとぎ汁が、流れ出て、流れて来て、そこにトシドンが住んでいるということだな。流れて来てそれが、その下の川に、こう流れ出て、ずうっとこう村に渡って来てるっちゅう。こんだぁ真実味っちゅうのかな、それを子どもが信じるように教えてたですね。でも結局は、我々小さい頃は、隣の兄さんたちが中学生が、やってたんですよ、トシドンを。中学生ぐらいか、あるいはそれ超えたぐらいの人がやってたですね。ところがもうほら、なかなかそういう人も、いなくて。

何か私がトシドン様ちゅうのを、「あっ、あれ人間がや

ってたんだなぁ」と、思うたのが小学校四年生。三、四年でやっぱり、兄さんたちに付いて回っとったら、「あれ、トシドン様ちゅうのは、人がやってたんだなぁ」と感じたのが、小学校何年だろうか。三年生の頃ぐらいかな、感じたのが。だから、兄さんたちの話をこう聞いてたりすると、ぽっと出る。そういうので、こう知りえたんですねぇ。[26]

〈事例３〉は瀬々野浦生まれの男性（昭和二十四年生まれ）によるトシドンについての語りである。瀬々野浦では、トシドンのことを通常「トシドン様」と「様」を付けて呼ぶそうである。この話者の語りをまとめると、次のようになる。

トシドンは「年神様」で、年の晩に「サヘエガ松」に下りてきて「トシドン石」の上から子どもたちの行いを見ている。大きなトシドン石にはトシドンが住んでいて、（そこで餅を作るので）石の割れ目から米のとぎ汁が流れ出て、その下の川に流れて村にまで来るなど、子どもが信じるように教えていた。トシドンは、首がない馬（首ひちぎ馬）に乗ってくる。首がない馬なのに、ヒヒヒンと鳴く。大きな白い餅は親がついて準備する。前もって親はトシドン役の人に、こういうことを言ってくれと子どもの情報を教える。自分がトシドンを人間がやっていたんだと思ったのは小学校三、四年生の頃だった。

調査時にトシドン実施の状況を聞くと、瀬々野浦には瀬々野浦トシドン保存会があるが、子どもがいないので、トシドンを何年もやってないとのことであった。地元にあった西山小学校（瀬々野浦は通称西山と称される）は平成二十四（二〇一二）年度に閉校となり、数人いる子どもたちは長浜小学校に通っているという。やはりトシドンの実施には、人口減少の問題が大きな影響を与えるようである。

〈事例３〉の話者によると、サヘエガ松は昭和四十年ぐらいまでは四本あったということであった。このことから、トシドン石の下の、サヘエの家があったとされる地に生えている松をサヘエガ松と呼称していたことがわかる。トシドンが天から下りて来る日については、大晦日と語る人と、大晦日の少し前ではという人がいた。天から下りて来たトシドンは、サヘエガ松から集落を観察したり、トシドン石の上で餅をついたりし、トシドン石の割れ目からトシドンが餅を作る際に出た白い米のとぎ汁が流れ、そのとぎ汁が下のサエ川から古町川へ流れていくと伝えられているそうである。

トシドン石は十メートル以上はある巨石で、瀬々野浦集落のはずれから十五分ほど登った、瀬々野浦小字夏迫（なつさこ）というところにある。来訪神トシドンが天から下りてきて住むとされる巨大なトシドン石は、古い時代から崇められてきた巨石とみられ、巨石信仰の面からも注目される[27]。

サヘエガ松（サヘエ松）は、トシドン石の下に生えた松が巨木となった頃、そこから瀬々野浦集落がよく見えるようになったため、サヘエガ松の枝にトシドンが乗って集落を見ているという伝承が生じてきたものと思われる。松の名称も、江戸時代のいつかにサヘエが住むようになってから生じた呼称とみられ、サヘエ以前のもっと古い時代には松の巨木もなくトシドン石の伝承のみがあったのではないかと推定される。現在、サヘエガ松はもうないので、時間経過とともに、サヘエガ松の枝に乗ってトシドンが集落を見ていたという伝承は衰滅していくのであろう。

〈事例３〉の話者が子どもの頃はトシドンの面はなく、タオルのようなもので工夫して行ったという。鼻の長い面は手打のトシドンで、瀬々野浦ではそういう面はなかったそうである。トシドンは首がない馬（首ひちぎ馬、首ちっきえ馬）に乗ってくるといい、首がないのにヒヒーンと鳴くとされるが、なぜ首がないのかについては伝わっていないということであった。

〈事例４〉「瀬々野浦のトシドン様」

トシドン様というのはあの、子どもの教育ですね、目的は。しつけ。つまり、直してほしいところを、トシドン様に親が言うわけですわ。いついつ妹をいじめたとか、そういうのは止めてほしいとか。子どもは皆、トシドン様というのは、何でも知ってるからびっくりする。どっから見てるのか。ほんで親よりも、聞くわけです。

面白い話は、実はトシドン様とゆうのはうちのじいさんやて見破って、聞かなかったいう話もあります。なぜかいうと、この手袋せんと手が見えたらしいですね。普通隠して行かなあかんですけど。じいさんの手が。普通はミノ（蓑）を着て、全部隠れるようにする。

（おじいさんがトシドンをしたのか？）身内の人が。僕らの年代でも、ありましたね。僕（昭和二十三年生まれ）よりも一級下のが言ってましたよ。「見つけてしまってなぁ」ゆうて。（トシドンをするのは）おじいさんもおばあさんも。おばあさんもなったりしました。うちおばあさんがなってました。よそはわからないんですけど。よく知ってる人が来たら、効き目は（ある）。[28]

〈事例４〉は瀬々野浦生まれの男性（昭和二十三年生まれ）によるトシドンについての語りである。トシドンの目的は子どものしつけで、トシドン役の人へ親はあらかじめ子どもに直してほしいところを伝えておくので、子どもはトシドンが何でも知っているとびっくりし、親よりも言うことを聞くそうである。〈事例４〉の後半に、トシドンがうちのおじいさんだと見破られた面白い話が語られている。トシドン役をする時、普通はミノを着て全部隠れるようにするが、手袋をするのを忘れたおじいさんがいて、手が見えてしまっておじいさんだとばれてしまったという。瀬々野浦ではトシドンになる人に決まりはなく、おじいさんもおばあさんもなったりしたということであった。〈事例４〉の話者は昭和二十三年生まれなので、子ども時代の

話者のところにトシドンが来たのは昭和二十年代後半頃のこととみられる。第二次世界大戦で青年層が減少したため、おじいさんやおばあさんも含めて幅広くトシドン役を務めたらしい。昭和二十三年生まれの〈事例４〉の話者の頃、瀬々野浦ではトシドンは一人で数人の従者と来たというが、最近はトシドン二人と数人の従者で来るという。

次に、瀬々野浦（西山）地区の南部に位置する片野浦（子岳）地区のトシドンの伝承をみてみる。片野浦には、岡、浜田、郷迫の三地区をまとめた片野浦トシドン保存会がある[29]。

〈事例５〉「片野浦のトシドン」

やっぱりトシドンっていうんですけど、子どもがもういなくなって、そういうあれもないんですが、年末の三十一日に、私らが小さい頃はそのう、トシドンていうのが、そういうあれがあったんです。まあ、子どもを戒めるみたいなね。あの泣いて。つい最近ですかね、無形文化財になってね。ここ片野浦と手打と、それから西山があるんですかね瀬々野浦。

これはね、子どもにあれするためにまあ、夕暮らみといったらもう暗くなってから、私らの小さい頃は、子どもが多い時代ですから。そういうたら、いつももらう餅に名前を書いてるなあと思って墨で大きな字で。親が作って大きなのがあるから、子どもに配るのに、トシドンが持って回って、ほいて間違わんようにこう、墨で大きなまさひろって書いとるのを、それをほかの人にやらんように、親がこう段取りして、トシドンに渡しよったとそういうあれがある。小さい時はそんな思わんかったですわ。ほいたら今考えてみたら、今はもう子ども少ないからそら、一軒一軒こう渡すかわからんですけどね。昔から親がおいでて、裕福な家庭は、大きな餅を投げた。ほいて子どもの多い兄弟の多いところは小さくなったりする。これを間違えんようになっとったんでしょうね。親がトシドンに、こうこうて、おねしょをするからそれをなんてとかという、そういうあれを、トシドンに、餅を渡す時、戒めてもらうようにそれを親がこう言い伝え、トシドンがそれを、よう知ってるなぁてゆうようなあれで。夜遅くじゃなくて子どもが寝らんうちに。その代わり、暗くならんと、あの、仮装しますから。子どもにわからんように。トシドンには、もう子どもにはもう全然その親が、頼んで、こういう悪いことするからそれを、言うこと聞かんから聞くように、ほいて兄弟げんかするからせんようになんとかしてくれとトシドンに言ってあるんでしょう。ほいてトシドンが、お前この前、弟をいじめるやろうかぁとかなんか言うのは、そら、親がトシドンに言ってるんです。あらかじめ、そういうて。ほで餅を預けて、ほでそういう戒めをして、トシドンが餅を与えていく。これは手打もどこも一緒です。トシドン様と言います。

ここはまた今度ぁ違って、どっかそこの山の上のあれに、天から下りてきて、ほいてこの、子どものとこに来るという話は聞いとったんです。詳しくは私も知らんのだけど、小さい子どもの時はそうしてよう聞きょうたですよね。天からその、悪いことしたりなんかしとったらトシドン様が見てるから一年に一回その、年の晩に来て、そういうことをまあ。[30]

〈事例５〉は片野浦生まれの男性（昭和十五年生まれ）によるトシドンについての語りである。ここの語りをまとめると以下のようになる。

子どもがもういなくなって今はやってないが、自分たちが小さい頃は年末の三十一日にトシドンというのがあった。片野浦、手打、西山（瀬々野浦）にあり、無形文化財になった。自分たちが小さい頃、親が子どもたちの名前を餅に墨で大きく書いているのを見た覚えがある。子どもが多い時代だったので、餅をトシドンが持って回って子どもに配るのに間違えてほかの子に渡さないように、親が段取りして、トシドンに渡していたようだ。小さい時はわからなかったが、今考えてみると、間違えないようにやっていたことがわかる。裕福な家庭は大きな餅、子どもの多いところは小さくなったりした。トシドンに餅を渡す時、戒めてもらいたいことをあらかじめ親がトシドンに伝え、トシドンがそれを言うと、よく知ってるなぁとなる。戒めをしてから、トシドンが餅を与える。これは手打もどこも一緒。悪いことをしていたら天からトシドン様が見ていると言われた。トシドンは山の上に天から下りてきて、年の晩に子どものところに来るという話は小さい頃よく聞いていた。

片野浦（子岳）地区も子どもが年々減り、子岳小学校は平成二十三年度に閉校になった。〈事例５〉で興味深いのが、小さい頃、親が子どもたちの名前を餅に墨で大きく書いているのを見た覚えがあるという語りである。話者は昭和十五年生まれであるから、これは昭和二十年の終戦前後あたりのトシドン行事での記憶ということになる。片野浦でもトシドンは山の上に天から下りてくると伝えられているということだが、この話者はトシドンが下りてくる山の名前を覚えていないとのことであった。

〈事例６〉「片野浦のトシドン」

昔トシドンもあった。今はもうみんな、若い人がいないし子どももいないし。私らが小さい時はトシドンもおったのに。若い青年がいた時は、面を作ってかぶって行っとったのに。全員、みんなでな。

（小さい頃トシドンが来たか？）来たよ。五、六人、あの当時は、大正九年（生）ぐらいのお兄さんたちがもう、四、五人で来よったよ。怖かった特に。小さい頃。みぃんな、大勢であとを付いて、餅を持って。

（トシドンは）ツーメから来よったって言うかなぁ。ツーメから馬ぇ乗って。（ツーメとは）瀬のことやかもね。（海が）しけてる日は馬に乗ってくる。海が荒れている時は馬

に乗ってくるって子どもに言い聞かせるんですよね。しけてなかったらそっから来たって、戸を立てて。（ツーメは）海の瀬のこと。何か知らんよ。「ツーメから来る」という。[31]

〈事例６〉は片野浦生まれの女性（昭和四年生まれ）によるトシドンについての語りである。小さい頃は、トシドンが五、六人きたといい、トシドン役には大正九（一九二〇）年生まれぐらいのお兄さんたちが来ていたという。〈事例６〉の話者のもとにトシドンが来たのは昭和十年前後頃かと思われるが、その頃、十歳ぐらい年長の青年たち（十五歳前後くらいか）がトシドンになっていたことがわかる。若い青年がいた頃は、面を作ってかぶって、餅を持って大勢であとに付いて行ったという。片野浦のトシドンは、「ツーメ」から馬に乗って来ると言われているそうである。〈事例６〉の話者はトシドンはツーメから来るとは聞いたが、ツーメの場所は知らないとのことであった。

〈事例７〉「片野浦のトシドンとツーメ」

私なんかが中学校頃まであったんじゃないかな。（トシドンは四、五人で来たか？）ですね。私たちの頃はもう中学生がしとったんじゃないかなぁ。青年団も中学生じゃなかったっけ。その前は青年団がしとって。お母さんとか、ばあちゃんがしたちって。おなごしてして、髪の毛やんかぶってきて、びっくりしたと言よったから、うちのばあちゃん。おなごして、した。ほとんど男の人がしよったんですけどね。兵隊に行っていなかったから恐らく、ばあちゃんがしたちって言よったから、女の人がしたんでしょうねぇ。（戦争に行って）男がいないからね。（中略）

だからその、（ツーメは）瀬の近くやんとなぁ。近くの、ちょっと上がった所。昔その魚なんかを捕る時に、上の方から魚の群れを見とって、地引き網をこうするのに、地引き網で黒鯛なんかを捕る時に、その上の方から見とってその指揮をこう、しよったんですよね。だからそこらへんから来るということだろうと思うんですけど。（ツーメの場所は片野浦浜田で）魚を捕る時に、合図するところ、ちょっと海からすりゃ四、五十メーター上がった、山際のところですよね。（海岸べりではなく）上に上がったところ。海岸は海岸なんですけど、魚が見える位置まで上がらんと、上からじゃないと魚が見えないもんだから。五十メーターばっか上かな。四、五十メーターのこう、歩く道を作っとって、魚の位置を見るのにこうずっと移動しながら、釣るところあって、そこからって言よったから、釣る道はそこやもんなぁ。キャンプ場よりかはまだ、向こうの方。港の向こう。港から見えます。港はこうあると、キャンプ場がここにありますよね。キャンプ場があって、これが海であれば、この辺になる。キャンプ場はここで。ほいで魚がここずうっと回ってこう、瀬を回ってずうっと行くところ、決まってるんですよ。黒鯛が回る瀬が。ここ必ず回って行くんです。ほいで回って行くのに、こっから出た時に、地引き網をここに、船を。こっちから行くと時間かかるもんですから、ここまで行っとって、魚が出たところをこう回って、囲んで捕りよった。ほいでこれを見張りするのがツーメっていうところのその、五十メーターぐらいの上のところに。恐らくそっから来るつうことやろうな。結局陸続きに来れるてゆうことだろうと思うんですけど下りて来るわけだから上から。[32]

〈事例７〉は片野浦生まれの男性（昭和二十二年生まれ）によるトシドンとツーメについての語りである。語りの中で港とキャンプ場について言及されているが、片野浦集落の北側に片野浦漁港があり、そのすぐ近くに片野浦キャンプ場がある。ここの語りをまとめると以下のようになる。

トシドンは自分が中学校頃まであった。トシドンは四、五人で来た。自分たちの頃は中学生がしていたが、その前は戦争に行って男性がいないのでお母さんやおばあさんがしたと聞いた。ツーメの場所は片野浦浜田で魚を捕る時に合図をするところで、海から四、五十メートル上がった山際のところを言い、そこは片野浦漁港から見える。ツーメは地引き網をする時に上から見張りをするところだった。トシドンは恐らくそこに天から下りてきて集落にやって来るということなのだろう。

昭和二十二年生まれのこの話者が子どもの頃、トシドンは中学生がしていたが、その前は戦争に行って男性がいないのでお母さんやおばあさんがしたと聞いたという。戦争で男性がいないので年齢性別関係なくトシドン役をやったという片野浦での語りは、瀬々野浦の〈事例４〉の語りと同様で、戦中戦後のトシドンの状況がうかがえる事例となっている。

片野浦のトシドンは、「ツーメ」から馬に乗って来ると言われているそうであるが、ツーメは海から四、五十メートル上がった山際のところの地名で、片野浦漁港が見える場所であることがわかる。しかも、ツーメは昔、地引き網で黒鯛などを捕る時に、上の方から魚の群れを見て指揮をする場所だったそうで、片野浦浜田の人たちにとって漁獲量に関わる重要なところだったことがうかがえる。このツーメにトシドンが天から馬に乗って下りてくると伝えられていることは、大変興味深いものがある。しかし、ツーメという地名は片野浦では忘れられつつあるようであった。

Ⅲ　手打・青瀬のトシドン

次に、手打地区のトシドンの伝承をみてみる。手打地区には麓トシドン保存会、港トシドン保存会、本町トシドン保存会という三つの保存会がある[33]。

〈事例８〉「手打麓のトシドン」

私たちが小さい時は、三つの時に、やってきまして、鹿児島から偶然ここに年越しして来ようちゅことで、おやじやらに連れられて来たんですけど、いつの間にかおやじが

ここの集落のトシドンに、息子に頼むと言って。「どんなトシドンだろうかなぁ」って思っとったら、カタカタカタカタっちて、ちょうど、昭和の十年代は、こうゆうようにして、舗装はなくて砂ですから、それへ下駄を履いて来るから、音がしてるカタカタカタ。そしたら、首のない馬に乗って来るて聞いたもんだから、黙ぁってしょったら、「ヒヒンヒヒン」って、人間が言うんですよ。「あっ本当に来た」。「はっばぁばぁばぁばぁ」って抑制しながら、「ここへつなごうじゃないか」って言って、庭に。うちなんか「首がないのになぁ」って思って。その頃は電気がないですから。ランプでしょう。ほでいろり（囲炉裏）からここに座ったんです。おやじ、私、お袋。

こういうように、シュロの皮で、段ボールに。ミノ（蓑）を着てですね。で、私ん時は、兄貴がやっとってなトシドンに。どうも似てるもんだから。こっちは二人。三人ですから。そしたら「おるかおるか」て言うのが、兄さんの声に聞こえるなぁ。こっちは違うから。片方を指して、片方の、

「こら、義民。お前がゆうこと聞かんと」。あの、声で聞いてくる。兄貴かなぁと思ったりして。そしたらこっちからあっちからやんやん言われて。「まずお前は、いろいろお母さんのことを聞いたりお父さんのことを聞いたりするんだけど、木の上に登るな」て言われた。こっちの、トシドンが。私は木登りが好きで、木から木に渡るのが好きで、猿みたいに。ほいで「木から落ちたら大変じゃないか」て言われた。「よう見てるなぁ」と思ったんです。それが全部、おやじとお袋が悪いことは全部、伝えてるんですよ。そういうまぁ、しつけされたんですけど、それが心に残っとった。（中略）（麓集落では勝山にトシドンが下りてくる？）はい。（港集落の沖の瀬の名は？）馬乗い口（うまのいぐち）――馬に乗る口――、ちう瀬がありますよ。ほで本町は勝山、うちんとおんなじ、麓と。結局山におると。そして時々天上、手打の言葉で天上――天の上――。天上てこれ空のことですよ。空から見ている。いわゆる監視されてるなぁって感じを受けさせるんですね。

全部昔は、あんどん（行灯）とかランプでしたから、そのために、むしょっこう（燭光ヵ）つけて、蛍光灯消して、全部むしょっこう（燭光ヵ）つけて、薄暗いところで。見たらほんと、普通このう、光あれば、ぱあっ人間やとわかるんですけど、むしょっこう（燭光ヵ）の光りはやっぱり怖さを感じる。そいで子どもたちは全部、「電気を消せ」ってやられて、「障子を開けろ」。ほて、絶対前にだけ出て、帰る時も後ろすざり。背中は見せんわけ。そして出て行って、「だぁだぁだぁ」って言って、馬にまたがったつもりで、トコトコトコって下駄を音して、へて行くんです。「おぉトシドンの、あれやなぁ」て言うて。へでまぁ、私が三歳、四歳、五、六歳までは、しているけれども、確かもう小学校の四年生五年生には不自然だろうと思っとったんです。[34]

〈事例８〉は手打麓の男性（大正十五年生まれ）によるトシドンについての語りである。これは昭和初期頃の麓集落のトシドンについての語りとなっている。ここの語りをまとめると以下のようになる。

子どもの時に、父親が麓のトシドンを依頼した。昔は舗装ではなく砂だったが、下駄を履いて来るからカタカタカタと音がした。首のない馬に乗って来ると聞いたので黙って待っていると、「ヒヒンヒヒン」と人間が言うので「あっ本当に来た」と思った。「ここへつなごうじゃないか」という声がしたので、「首がないのになぁ」と思った。その頃は電気がなくランプだった。いろり（囲炉裏）のところに、父、自分、母と座った。トシドンはシュロの皮を段ボールに付け、ミノ（蓑）を着ていた。自分の時は兄がトシドンをしており、「おるかおるか」と言うのが兄の声に聞こえるので、兄かなぁと思ったりした。兄の声で、母や父のことを聞いたり、木の上に登るな、木から落ちたら大変じゃないかと言われた。自分は木登りが好きだったが、よく見てるなぁと思った。父と母が悪いことを全部トシドンに伝えており、そのようにしつけされ、それが心に残っている。昔はあんどん（行灯）やランプだったので、薄暗いところで見ると怖さを感じた。トシドンは前向きに来て、後ろすざりで帰り、背中は見せなかった。家から出ると、「だぁだぁだぁ」と言って、馬にまたがったつもりでトコトコトコと下駄の音をたてて行った。自分が三から六歳くらいまでしたが、小学校の四、五年生頃には不自然だろうと思っていた。

麓集落では勝山にトシドンが下りてくると聞いたので、そのことを聞くと、麓集落と本町集落では勝山にトシドンが下りてくるというが、港集落では馬乗い口（うまのいぐち。馬乗い瀬〈ウマノイセ〉ヵ）という沖の瀬に下りてくるといわれているとのことであった。子どもたちに、トシドンは天上（空）から見ているというそうである。

ここでは、港集落では馬乗い口に下りると述べているが、通常は馬乗瀬（うまのいせ）と呼称される。港の入口にある馬乗瀬は、トシドンの馬が乗る瀬という意味とみられ、トシドンは馬に乗ってその瀬に天から下りてくると伝えられている。港のトシドンは「首なし馬に乗って馬乗瀬にやってきて、そこから泳いで観音山に行く」、本町のトシドンは首なし馬に乗って天上界から牧山、勝山、ツグチ山、馬乗瀬に下りてくる、海の彼方から来る、ケーガラ船（貝殻船）に乗って来るなどといわれているそうである[35]。手打の三地区のトシドンの足取りは話者によって違いがあるようである[36]。

〈事例９〉「手打麓のトシドン」

私が覚えているのは、段ボールに眼を付けて、段ボールに耳付けて、鼻が高いと、いうような。これがですね、我々も初めてこの、民俗文化財として指定されてから、他の集

落のがわかったというんですかね。結局ですね、十二月三十一日のだいたい、夕方六時ごろから九時ごろまでの間にこう回るわけですよ。どこも回るんです、どこの集落も。今、六つありますけどね。そうすると、今度は我々麓地区なんだけれども、麓地区の人が本町のトシドンを、見に行く機会がないんですよ。同じようにこう進行してるわけでしょ。ほいで同じようにするもんですから、どっちもどっちも、自分のところのトシドンしか知らないというような部分もあったんですね。

常々ですね、この麓地区は、ちゃんとみんな正座して、例えば正装みたいにして正座して座ってトシドンを迎えると。神として迎えるとゆうようなあれが、ずっと我々のところにあったんですね。ところが他の所はですね、写真なんかを見ると、もうそこにこうお膳なんか置いて、なんか物を食べながら、子どもはこっちの方でトシドンに設けると。へで笑いながらこうなんかすると。そういうなのを、ちょっと見たりするんですけども、私どものとこはそうじゃないと。あぁそれはとんでもない話だと。神として、受けるわけだから、神様として神の化身として、天上界から下りて来られたんだから、ちゃんとした正装をして、服装で、お迎えをするというようなことをずっと言われてきてましたよね。だからその、その辺に食べ物を置いて、なんか飲み物を置いて、食べながら飲みながら、こうにやにや笑いながら、トシドンを迎えると、いうようなことはもう絶対してないんですね、麓地区は。正装てまあ、その辺のその、恥ずかしくないような服装ですよね。うちのじいさんたちは、ちゃんと、あれ着てこうしよったですよ。紋付き袴じゃないですけどね、まあちゃんとした服装恥ずかしくない服装で、してました。[37]

〈事例９〉は手打麓の男性（昭和十四年生まれ）によるトシドンについての語りである。これは終戦前後頃の麓集落のトシドンについての語りとなっている。ここの語りをまとめると以下のようになる。

自分が覚えているトシドンは、段ボールに眼と耳を付けて鼻が高いというようなものだった。今トシドンをする地区は六つあるが、どの地区も十二月三十一日の夕方六時頃から九時頃までの間に回り、自分のところしか知らないので、無形民俗文化財に指定されてから他の集落のトシドンのことがわかった。麓地区では、きちんとみんな正座して、神としてトシドンを迎えた。神様として神の化身として天上界から下りて来られたのだから、きちんとした服装でお迎えをするとずっと言われてきた。だから、その辺に食べ物や飲み物を置いて、食べながら飲みながら、にやにや笑いながらトシドンを迎えるというようなことは絶対していない。自分の祖父たちは、紋付き袴ほどではないが、きちんとした恥ずかしくない服装でしていた。

〈事例９〉の話者によると、麓集落では、トシドンは神様として神の化身として天上界から下りて来られたのだから、トシドンをきちんとした服装でみんな正座して神としてお迎えしたという。手打地区で聞き取り調査をすると、麓地区は士族集落、本町地区は農業集落、港地区は漁業集落ということであった。トシドンは江戸時代には行われていたと推定されるが、江戸時代の麓地区では、紋付き袴などの服装でみんなが正座して、天上界から下りて来た神としてトシドンを迎えたのであろう。昭和十四年生まれの〈事例９〉の話者の記憶にある、正座してトシドンを迎える祖父たちの姿は、恐らくかくしゃくとしたものだったと思われる。時代や地区によってトシドン行事の所作や内容が異なっていたらしいことがうかがえ、興味深いものがある。なお、港地区でも、自分たちの祖父は紋付袴でトシドンを迎えたと語る事例もあるので[38]、かつての手打地区では、麓だけではなく港や本町でも、きちんとした服装で正座してトシドンを迎えていたのであろう。

手打でトシドンが下りてくるところは、麓集落と本町集落は手打地区の北東にある勝山で、港集落は沖にある馬乗瀬という伝承も興味深い（話者によりゆれがある）。勝山は手打地区の近隣では一番高い山なので、そこに下りてくるとされたのであろう。片野浦浜田では魚を捕る時に見張りをする重要な地「ツーメ」にトシドンが下りてくると伝えられていたわけであるが、港地区は漁業集落ということなので、港の沖にある瀬に下りてくるというのも、伝承の背景には何らかの意味（海の幸をもたらしてくれる沖の瀬など）が込められている可能性があるように思われる。また、勝山について、麓集落と本町集落からは勝山が見えるが、港集落からは勝山が見えない（見えにくい）という話者がいた。港地区だけが勝山に下りるとされないのは、港集落からは勝山が見えないということも影響しているのかもしれない（トシドンは高いところから見ていると子どもたちに言うので、見えないとしつけの効力が少なくなることになる。港集落では馬乗瀬から観音山に行って見るとされる）。

次に、青瀬地区のトシドンの伝承をみてみる。青瀬地区には青瀬トシドン保存会がある[39]。

〈事例10〉「青瀬のトシドン」

僕なんかの小さい時はね、近所の人が面じゃなくって何かかぶるみたいにして、「おるかおるか」言うて来よった。「おるかおるか」いうて言いよった。そいで、親なんかが言うのには、トシドンさんが手打のタケントウゲいう峠があります、手打との境に。そこに、首なし馬に乗って来るんじゃいうて。そう言うてたけどなぁ。それがだんだん、なんして、今度ぁ天狗さんみたいな面作るようになって、そして青瀬岳（あおせおたけ。青潮岳ヵ）からこう見てるとかゆうことになって現在は。昔は首なし馬に乗ってきて、なんて、怖がらせよった。タケントウゲ。そこの瀬尾（せび）の一番高いところです。（そこから首なし馬に乗って）やってくるゆうて言われてる。

（トシドンはどこにいる？）山におる、ということで。最近は、そこの一番高い青瀬岳（あおせおたけ）いう山があるんだけど、そこに天から下りてきてね、それへもうずっとみんなが、悪いことしたりええことしたのを見下ろしてるんじゃと。そいだから悪いことしたらもうちゃぁんと見てるんやからやな、いうような。要するに、しつけのなんの、でしょうねぇあれ。[40]

〈事例10〉は青瀬の男性（昭和七年生まれ）によるトシドンについての語りである。ここの語りをまとめると以下のようになる。

自分が小さい時は、近所の人が面ではなく何かをかぶるようにして「おるかおるか」と言って来た。親などが、トシドンが手打との境にあるタケントウゲという峠から首なし馬に乗って来ると言って怖がらせていた。それがだんだん変わり、現在は天狗みたいな面を作るようになり、青瀬岳（青潮岳ヵ）から見ているということになっている。トシドンは山にいるということで、最近は、一番高い青瀬岳（青潮岳ヵ）に天から下りてきて、ずっとみんなが悪いことや良いことをするのを見下ろしていると言っている。要するにしつけだろう。

この語りで興味深いのは、青瀬地区のトシドンが変化してきている点であろう。昭和七年生まれの話者が子どものころは、トシドンは面ではなく何かをかぶるようにしていたというが、現在は天狗のような面をつけるようになっているそうである。また、トシドンが下りてくる場所も、昔は手打との境にあるタケントウゲという峠から首なし馬に乗ってくると言っていたが、現在は一番高い青潮岳（あおしおだけ）に天から下りてくると変更されているという。これらが変更されたのは戦後のことだそうである。トシドンが下りてくるところが青潮岳に変更されたのは、タケントウゲという峠を子どもたちが知らなくなったからということであった。タケントウゲ周辺にトシドン石のような巨石があるかを聞いてみると、巨石はないとのことだった。また、トシドンが下りてくる場所については郷ごとに異なっており、「南の郷ではタビラから、堂之下や向井という郷では青潮岳から」と言っていたという報告がある[41]。

青瀬で調査中、トシドンの面を作成した時のことを聞いた。その男性（昭和二十六年青瀬生まれ）によると、昭和五十二年か三年頃、ＮＨＫかどこかが取材に来た時に、青年団で面を作ったという。その時、鬼の面を四つか五つ買い、それにシュロ（棕櫚）を付けたりして独自に作ったそうで、昔の着物のドンダ（労働着。ドンザ）とか山着（ヤマギ。野良着）や、ミノ（蓑）を用意したという。ミノは専門の人に頼んで入手したそうで、費用は保存会から出してもらったそうである。

トシドンが来る時の音について聞くと、昔は法螺貝、拍子木、鈴を使ったということであった。鳴り物には一人ずつその係の付き人がいるそうだが、法螺貝は今は吹く人がいないので使っていないという。鈴は、首なし馬が付けている鈴の音を指すそうである。ただ、鳴り物は後からのことだそうで、昭和七年生まれの〈事例10〉の男性が子どもの時のトシドンは、何も鳴らずに「おるかおるか」とひょこっと来たという。

青瀬のトシドンは、玄関に入ってすぐ行い、餅は最後にトシドンとお利口にすると約束したら渡されるという。ところが、青瀬のトシドンがくれる餅について、次のような話を聞いた。

〈事例11〉「青瀬のトシドンと餅」

トシドンさんゆうて、トシドンさんは持ってこんかったけど、朝起きたら、なんした頭元にこんな小っさい餅を置いてありました。だいたい、親が置いとったのとちゃうかな思うんですが。「トシドンさんが持ってきたど」言うて。「置いて行きよったよ」言うて。「言うこと聞かんとあかんでこれ」言うて。ほいから褒美が、トシドンが来た時じゃなくてやな、帰ってあぁっと全然目が覚めたら、餅が置いてあったわけ。[42]

昭和七年生まれの〈事例11〉の男性（〈事例10〉と同じ話者）は、トシドンが来た時には餅をもらわなかったが、翌日の元旦に起きたら枕元に小さい餅が置いてあり、「トシドンさんが置いていきよったよ。言うこと聞かんとあかんで」と親から言われたという。大晦日にトシドンが来た時には餅をもらわず、翌日の元旦にトシドンが持ってきたという餅が枕元に置いてあったというこの事例は、筆者が下甑島で調査をした各集落では、他に聞くことができなかった。かつては、トシドンがくれる餅は、大晦日に渡される場合と元旦に枕元に置いてある場合と、二つの場合があった可能性があり、注目される。

青瀬のトシドンは、昭和五十二年から公民館主体でやることになり、平成二十五年には青瀬郷土芸能保存会の組織が三部門に再編され、その中のトシドン部門が行っているという[43]。

Ⅳ　内川内・藺牟田のトシドン

次に、内川内地区のトシドンの伝承をみてみる。内川内地区にはトシドン保存会はない。

〈事例12〉「内川内のトシドン」

私らが小さい時は、やってました。終戦ぐらいまではやってましたね。それまでは、ここも小学校があって、百人ぐらいおったんですよ。ほで、高等科は西山（にしやま）に行ったり、長浜（ながはま）に行ったり。へぇで、新制中学になってから、私らが新制中学の二期生ですから、高等科から新制中学の編入というんですか、になって。ですから、私らの一個上の人が一年行って、へで私らが二年行って、その後の子らが三年間、ずうっと長浜に通ってた。歩

いて。大変です。

高知（内川内）でも西山（瀬々野浦）でも、トシドンは村の先輩たちがやっとったんですけどね。仮装して。（トシドンの鼻は長いか？）いや、そんなんはなかったですね。ちょっと、わからんようにカモフラージュして、やってました。ミノ（蓑）というてワラ（藁）で編んだ衣装着たり。（顔に）なんか塗ったりして、やってました。（顔に）赤やら黒やら塗ってましたよ。青年団がやっとったですねぇ。（トシドン役は）男でした。（トシドンはどこから来ると言われていたか？）ここでは、地区の長老たちがそういうこと考えてやっとったんでしょうねぇ。（トシドンがどこから見ているとか言うことがあったか？）そういうこともなかったですね。（何人で来た？）ここ内川内（うちこうち）の場合は二人ぐらいじゃったですよ。（馬に乗ってくると言うか？）そういうことは記憶にないですねぇ。（様をつけて呼ぶか？）漠然と内川内の場合は、トシドン。（小さい頃トシドンが来たか？）来ました。覚えてます。（怖かったか？）そうですね。[44]

〈事例12〉は内川内の男性（昭和八年生まれ）によるトシドンについての語りである。ここの語りをまとめると以下のようになる。

自分たちが小さい時は高知（内川内）でも西山（瀬々野浦）でもトシドンをやっており、終戦ぐらいまではやっていた。ここにも小学校があって百人ぐらいいた。高等科は西山（瀬々野浦）や長浜に歩いて行っていた。西山もトシドンは村の先輩たちが仮装してやっていた。トシドンの鼻は長くなかった。わからないようにカモフラージュしてやっていた。ワラ（藁）で編んだミノ（蓑）を着て、顔に赤や黒などを塗って、青年団がやっていた。トシドン役は男がした。トシドンはどこから来るとかは知らない。トシドンがどこから見ているとか言うこともなかった。内川内ではトシドンは二人ぐらいできた。馬に乗ってくるとかは記憶にない。内川内はトシドンといい「様」はつけない。小さい頃トシドンが来たことを覚えており、怖かった。

内川内は瀬々野浦（西山）の支村で瀬々野浦の北方に位置し、瀬々野浦からの移住者が尾岳連峰の中腹を開拓して居住するようになったという。伊能忠敬が文化七（一八一〇）年八月に甑島を調査した際、内川内に二十軒余の人家があることを記していることから、江戸時代末期にはまとまった集落があったことがわかる[45]。先にみた種子島の事例のように、人と共にトシドン行事も移ってゆくので、江戸時代に瀬々野浦から内川内へ移住した人たちは、瀬々野浦のトシドン行事を内川内でも行ってきたことがわかる。したがって、内川内のトシドンは瀬々野浦のトシドンと似ていたのではないかと推定される。内川内小学校は生徒数が激減したため昭和五十三年三月に閉校した（昭和五十三年四月から児童二名となり、長浜小学校に統合された）[46]。

昭和八年生まれの〈事例12〉の話者によると、内川内ではトシドンを終戦ぐらいまではやっており、青年団の男性たちが、ワラで編んだミノを着て、顔に赤や黒などを塗ってやっていたという（手打麓では終戦前には中学生がトシドンをしていたそうなので、ここの青年団も同様の年齢だったのであろう）。内川内のトシドンの鼻は長くなく、二人ぐらいできたといい、トシドンはどこから来るとか、どこから見ているとか、馬に乗ってくるとかは記憶にないとのことであった。

〈事例12〉話者の語りから、内川内のトシドンは面をかぶっていなかったことがわかるが、内川内のトシドンについて、鼻の長い面をかぶっておじさんたちがやっていたという報告がある[47]。内川内の先祖が移住前に住んでいた瀬々野浦では面をかぶっていなかったようなので、やはり内川内のトシドンは面をかぶらないのが古い形だったと推定される。つまり、鼻の長い面をかぶっておじさんたちがやっていたという報告からは、終戦前頃の内川内のトシドンに、手打のトシドンのような鼻の長い面をかぶる形が一部に入ってきていたらしいことがうかがえる。

次に、下甑島北部に位置する旧鹿島村の藺牟田地区のトシドンの伝承をみてみる。藺牟田地区にはトシドン保存会はない。

〈事例13〉「藺牟田のトシドン」

トシドンは、ずうっと前から。トシドンはねぇ、優しい人には、いい餅をあげて、この人はやかましかったから、こっぱで、芋でついた餅をもらっていたの。この人は、やかましかったから。兄さんの方は、優しかったから、米の白い餅をもらって食べてねぇ。他の二人は、食べて。この人はやかましかったから、こっぱ餅のこんなの。なんして向こうから全員出て、並ばせてここになあ。この前までは孫たちをしていました。トシドンは、個人で頼んでねぇ。（山から下りてくると言うか？）そんな形してねぇ。（どこの山から下りてくると言うか？）どこでもさぁ。今役場のみたいな、あんな怖いトシドンでなくって、箱を背負って、白い着物を着て、十円玉を湯飲みの中に入れてねぇ、ガラガラいわせて。子どもはここにずうっと並ばして。

白い装束着て、白い頭巾をかぶって、手袋も白いのをして、眼だけ見えるようにして。でも怖かったよう、あたしたちも。みんなしょうたといなぁ。あたしなんかが小さい時も来ていましたよ。ミノなんかは、後からじゃ。やっぱり、着るトシドンもおる。おんなじ人でだいたら、トシドンもよ、知り合いの人に頼んで、していましたので、今みたいに役場でするでなくって、個人で自分の知り合いの人に頼んで、していましたの。してそれもこの、一人一人の、個性のこと、話しちょって、そんなに言って、その餅を、あげるの。それは。トシドンにな、一人一人の個性をよ、話していて。してその、あげるものも、違うのら。ここの孫はね、一人来ない子、孫がいるの怖くて。怖いと言って。コタツの中に入っとって、長男の方の孫が裏から出てきたっ

て。今はもう役場でしてますんでなぁ。

（小さい頃は何人来たか？）一人来てましたの。（どう帰るか？）後ろ姿で。（どんな箱を背負ってきたか？）リンゴ箱よ。昔の、小さい。リンゴ箱に白い切れを貼れてな。[48]

〈事例13〉は大正七（一九一八）年に藺牟田で生まれた女性による藺牟田のトシドンについての語りである。調査時には九十七歳の高齢であったため少し語りにまとまりがないが、この話者が子どもの頃に経験したトシドンについての語りであるため、極めて貴重である。大正七年生まれのこの話者の元にトシドンが来たのは大正時代末期だったことになるので、先にみた桜田勝徳氏による昭和八年の報告より約十年前のトシドンについての記憶ということになる。ここの語りを簡略にまとめると、次のようになる。

トシドンはずっと前からここ（藺牟田）に来ていた。トシドンは優しい子には米の白く良い餅をあげるが、やんちゃな子にはこっぱ餅（サツマイモを原料とした餅）を渡した。トシドンは子どもを全員並ばせた。自分も、自分の子どもたちも、孫たちもトシドンを経験した。トシドンは山から下りてくるといい、特に決まった山はない。昔は今役場がやっているような怖いトシドンでなく、箱（昔の小さいリンゴ箱に白い布切れを貼ったもの）を背負って、白い装束を着て、白い頭巾をかぶって、白い手袋をして、眼だけ見えるようにして、十円玉を湯飲みの中に入れてガラガラいわせて来た。自分が小さい時も自分のところにもみんなのところにも来ていたが、怖かった。ミノ（蓑）などを着るのは後からだが、ミノを着るトシドンもいた。トシドンは今みたいに役場でするのでなくて、個人で自分の知り合いの人に頼んでしていた。トシドンに一人一人の個性のことを話しておき、トシドンは一人一人に言って餅をあげるが、それぞれにあげる餅も違う。自分が小さい頃は、トシドンが一人来ていた。トシドンは後ろ姿で帰って行った。

この語りを聞いた時、三男の男性（昭和二十九年生まれ）が横に座っていたため、この人はやかましかったから芋でついたこっぱ餅をもらったが、兄さん二人は優しかったから米の白い餅をもらって食べたと、笑いながら楽しそうに話してくれた。トシドンは並ばせた子どもたちに餅を手渡して、背中には乗せなかったそうである。

藺牟田のトシドンは山から下りて来ると言われているかを聞いてみると、「そんな形してねぇ」、さらにどこの山から下りて来るかを聞いてみると、「どこでもさぁ」との返答であった。つまり、藺牟田のトシドンは山から下りて来ると言われているが、どこか特定の山から下りて来るとは言われていないらしいことがわかる。

トシドンは白い布切れを貼ったリンゴ箱を背負ってきたということであったが、その箱の中には餅が入っていて、そこから餅を出して子どもたちに手渡したそうである。今はその箱の中に、餅のほか、果物、おもちゃなど、子どもがほしいものが入っているということであった。

〈事例14〉「藺牟田のトシドン」

面をかぶるんじゃないですか、今は。昔はもう、普通のあれで、子どもが怖がる格好していたけど。（服は）ミノじゃなくして普通の、百姓が着るようなボロ着物を着て、（顔は）面じゃなくして布で。なんか、タオルかなんかでこう、覆面みたいにしてかぶったり、いろいろその人で変装するから。決まってないから。箱を背負って、その中にお餅を入れて、トシドンって年餅、餅を、大きな餅を、家族が内緒で子どもが見てない時に、そのトシドンに渡して、それを持ってきてあげる感じです。それが年をとる、あれになるわけ。その餅をもらったら、一つ年をとることになる。年餅っていって。子どもを前に据えて、「お父さんお母さんの言うこと聞くか」って言ったりして、いろいろ、良い方に導くあれを言うんです、子どもに対して。

神社から来るような感じやった、じゃないんですかねぇ山から来るか。（山のどこか？）わからん。ここは、指定の場所はあったかもなぁ。神社から来るといったりする話も、あったけど。鹿島神社。そっから、神様が来るような感じ。（トシドンは）神様になるわけ。（鹿島神社は）山にありますから。神様って。神様の言うことを聞かないと、なにか罰をもらうような感じやったんで、やっぱり、子どもの教育のためじゃないの。言うことを聞けて言ったり、悪いことをするなって言ったり、やっぱりいろいろしつけるのが目的じゃないんですか。「言うこと聞かないとトシドンが来るよう」って言って、その近辺はやっぱり。へで、歌を歌えって言ったりするんですよ。やっぱり。学校のはやりの歌を歌ったり。

あれは鈴を持ってますのでちりんちりんって。茶碗に、石かなんかを入れてこうつつんで、こうからんからんって。その音がもう、怖いのは一番。からんからんっていったら、「あっトシドンが来た」って、みんながもう、怖がって、並んで迎える感じ。「来てるよう」とゆう合図になるわけ。（馬に乗って来るか？）いや。そのまま足で来ます。一人で来ょうたけど、二人で来るようになったです。昔は一人。（どっち向きで帰るか？）後ろ向いて帰る。当たり前に、そのまま帰る。[49]

〈事例14〉も藺牟田のトシドンについての語りである。藺牟田で昭和七年に生まれた男性の語りをまとめると、以下のようになる。

今は面をかぶるが、昔はタオルかなにかの布で覆面のようにして変装した。服に決まりはなく、ミノではなく普通のボロ着物を着た。箱を背負い、その中に大きな年餅を入れた。家族が内緒で子どもが見ていない時にトシドンに餅を渡して、それをトシドンが持ってきて子にあげた。その餅をもらったら、年餅といって、一つ年をとることになる。トシドンは山から来るとかいうが、特定の山かはわからな

い。鹿島神社（山にある）から来るとも聞いたことがある。トシドンは神様で、神様の言うことを聞かないとなにか罰をもらうような感じだった。言うことを聞け、悪いことをするなと、いろいろしつけるのが目的ではないか。「言うこと聞かないとトシドンが来るよう」と言った。トシドンは歌を歌えと言うので、学校のはやりの歌を歌ったりした。茶碗に石かなにかを入れて、からんからんとならし、その音が怖い。からんからんとなるとみんなが怖がって並んで迎えた。馬に乗って来るとはいわず、そのまま足で来る。昔は一人で来ていたが、今は二人で来るようになった。トシドンは後ろを向いてそのまま帰る。

この〈事例14〉で注目されるのは、トシドンが子どもたちに渡す餅は「年餅」で、「その餅をもらったら、一つ年をとることになる」という部分である。桜田勝徳氏は先に引用した「甑島遊記（五）」A部分でトシドンを「年殿」と表記していたが、トシは「年」でドンは「殿」で敬称であるから、トシドンは年を取らせる存在と認識されてきたことがうかがえ、トシドンが大歳（大晦日）の夜に来て子どもたちに年餅を渡すことには、重要な意味があることがわかる。トシドンは年を取らせる年神と考えられているのであろう。

〈事例13〉の語りから藺牟田のトシドンは山から下りて来ると言われているがどこか特定の山から下りて来るとは言われていないことがわかったが、〈事例14〉の話者も同様で、山にある鹿島神社から来るとも聞いたことがあるとのことであった。旧鹿島村のトシドンはどこから来ると言われているかという点について、「鹿島のトシドンは、タッチョンウエという山やソノ山、またはそれぞれの郷に近い山におり、そこから子どもの言動をいつも見ていて、大晦日になると降りてくると伝えられています。天上界から降りてくる、首なし馬に乗ってくる、とよく言われますが、そうした謂（いわ）れが鹿島にあったかどうかはわかりません。」[50] という聞き取りが報告されている。やはり、旧鹿島村のトシドンは、特定の山から下りて来るとは言われず、近くの山から大晦日になると下りてくると伝えられてきたことがわかる。首なし馬に乗ってくるという他地域で良く語られる伝承については、筆者の調査でも、鹿島では聞くことができなかった。餅についても、鹿島では昔は手渡しであったが、今では背中に餅を乗せるようになったという。また、鹿島のトシドンも一時期中断したことがあったそうだが、保存会がないので教育委員会（旧鹿島村教育委員会、合併後は薩摩川内市教育委員会教育部鹿島教育課）がトシドンを行っているそうである[51]。

Ⅴ　首切れ馬と天馬伝説

これまで見てきたように、下甑島各地のトシドンは、天から首切れ馬に乗って下りてくると伝えられているところが多い。天から馬が下りてくるという点に関して、上甑島には次のような天馬伝説が伝承されている。

〈事例15〉「天馬の足跡」

昔話みたいなやつで、天馬の足跡があるとかゆう。それは私もここにまだいる時に、小学校に入る前に、見に行ったことあります実際にね。馬の足跡が二つあって、その右っかわの方だった確か杖の跡があるんです。馬の足跡がちょうど、本当にきれいに、馬の足跡なっとるんですわ。ここに、辰丸（たつまい）ていう、我々はタツマイていうところの手前にアコギという所があるんです。タツマイはね、ここに、ちょっとちっちゃな岩がありますね。そこがタツマイなんですよ。それをタツマイていうんですわ、ここの人は。ここの湾になってる所がアコギなんです。このへんの道の所にあります。[52]

〈事例16〉「天馬の足跡」

（天馬の足跡は）辰丸（たつまい）という所の上にありますよ。アコギていいました。アコギの山という所にあっとよ。そこに足踏み込まれんもん。車も通らないし。ダムの所まで行ったら先に行かれないし。[53]

〈事例17〉「天馬の足跡」

馬に乗ったまま、岩の上に下りて、下りたらそのう、馬の足跡が、四つ、その岩にあるわけですよ。そんなお話だったよね。私は行ったことないですけど。そういう話があって、役場で見に行ったらしい。観光にならないかみたいな、調査に。あったらしいですよ。天から降ってきてるんですから、天馬ですよね。（穴は）四つて聞いた。確かめに行こうか、ていう気持ちもあったりしましたけど、もうやぶ（藪）でですね、行けるとこじゃないです。アコギ（にある）。[54]

これらの話は上甑町桑之浦で聞いたものである。上甑町桑之浦のアコギに辰丸（たつまい）というところがあり、そこに天馬の足跡石があるということであった。現在は、やぶ（藪）になって行けないとのことで、実際に見ることはできなかった。〈事例16〉と〈事例17〉の話者は実際に行って岩の上に馬の足跡があるのを見たそうで、〈事例18〉の話者は見たことはないが天馬の足跡石があると聞いていると語ってくれた。この天馬の足跡とされる「馬蹄石」の伝説は、上甑町桑之浦ではほとんどの人が知っている有名な話であった。

筆者が平成二十八（二〇一六）年八月に奄美大島の大和村（鹿児島県）で調査している時、今里でノロ祭祀の神役を務めてきた女性（昭和四年生まれ）から「神が天から馬に乗って下りてくる」話を聞いた。奄美大島のノロ祭祀はほとんど途絶えているが、今里などわずかに残っていた。この女性によると、高齢による体調不良で、平成二十八年四月に今里の神役五人全員がトネヤに集まって、天にノロを返したとのことであった（その後、鹿児島にいた二人も返したそうである）。その時の聞き取りの際に、神祭りの

時、神が馬に乗って集落を回っている音を聞いたという話を語ってくれた。「ホー」という馬の鼻息や、「パックンパックン」という馬の蹄の音がしたということであった。神はどこから来るのか聞いてみると、「天の神様が山のてっぺんに下りて、それから下りてくるだろうちゅ思うね」と答えてくれた[55]。ノロ祭祀の神役ならではの語りであった。琉球諸島各地には、今でもノロ祭祀が残っているが、かつてのノロ神たちは、祭事の際には馬に乗って移動した（例えば、沖縄県伊平屋島田名の海神祭では二十余人の神人による乗馬行列があった）[56]。このことがあるからなのか、馬を使わなくなってからも、神役たちに聞き取りをしていると、祭事の時に馬の鼻息や馬の蹄の音を聞いたと語ってくれることが時々ある。

奄美大島は琉球文化圏の中にあり、甑島は九州文化圏の中にあるが琉球文化の影響を受けていることから、ノロ祭祀の神役が語ってくれた「神が天から馬に乗って下りてくる」話は、天から馬が下りてくるという上甑島の伝説や、天から首切れ馬に乗って下りてくるという下甑島のトシドン伝説と何らかの関係があるように思われる。

なお、トシドンと首切れ馬について、愛媛県、香川県、徳島県、高知県、福井県の「首なし馬」伝説とからめて、手打地区士族階級御霊譚としてトシドン行事を論じた説があるが[57]、愛媛県等の「首なし馬」伝説は怪異譚、怨霊譚として伝承されており、「年神」としての甑島のトシドンとは根本的に性質が異なる。

トシドンが首切れ馬に乗ってやってくるとされるのは、恐らく子どもたちを怖がらせて良い子にしつけるために後代に付加されたものではないかと推定される。

Ⅵ　年神と呼称の問題

下甑島のトシドンは「年殿」で、大晦日の夜に来訪する「年神様」（本稿〈事例３〉参照）と認識されている。つまり、下甑島には大晦日の夜に「年神様」のトシドンが来るわけである。では、上甑島ではどうなのであろうか。

先に見た桜田勝徳氏「甑島遊記」に、上甑島里村の「年神様」についての記述がある。貴重な記録なので、次に引用する（傍線を付した）。

◆「甑島遊記（二）」昭和八年一月六日の条

ここでは年取りの晩に子供の寝床の中にひそかに餅と銭とを入れておいてやる。元朝に子供が起ると昨夜白髪の爺さんが来て、お前に年をやつたのだと親が云つてきかせる。これが即ち年玉であり、その餅は丸い小餅である。／年末の二十九日三十日頃に子供が泣くと正月の神様があの島（又はあの山）まで来てござるに静かにせぬか、喧しくすると正月の神様はお前に年をやらぬぞと脅かす。という事であるので、白髪のおいさんが正月の神であることがわかる。また／年取りの晩に便所に行くと白髪かぶると言つて、子供を便所に行かせぬようにしている。白髪かぶるとは頭に白髪がはえるということである。その理由は、この晩には白髪のおいさんが便所まで来ていることがある。そこへ上から汚物をおとしては悪いからだ。[58]

この記述から、上甑島里村の「年神様」について、次の三点にまとめることができる。

一、下甑島では、年取りの晩（大晦日）に子どもの寝床の中にひそかに丸い小餅とお金のお年玉を入れておき、元朝に子どもが起きると「昨夜白髪の爺（おい）さんが来てお前に年をやった」と親が言って聞かせる。……【年餅・年をくれる】

二、「白髪の爺さん」は正月の神様で、十二月二十九、三十日頃には近くの島または山まで来ており、「やかましくすると正月の神様はお前に年をやらないぞ」と親は子を脅す。……【島・山に降臨して観察】

三、年取りの晩には「白髪の爺さん」が便所まで来ていることがあるので、上から汚物を落としては悪いから子どもを便所に行かせないようにしている。……【大晦日に実体来訪と説明】

これら三点は、下甑島のトシドンと中核部分が共通している。まず一点目【年餅・年をくれる】であるが、下甑島のトシドンも、上甑島の白髪の爺さんも、年取りの晩（大晦日）に来て子どもたちに年餅（お年玉）を渡して年をくれる。二点目【島・山に降臨して観察】は、下甑島のトシドンも、上甑島の白髪の爺さんも、十二月二十九、三十日頃には近くの「島」または「山」まで来て子どもたちを見ているとされる。「山」は下甑島のトシドンは集落近くの山に下りてくるとされ（手打麓集落では勝山）、「島」は手打港集落では馬乗瀬に下りてくるとされる。三点目【大晦日に実体来訪と説明】は、下甑島のトシドンも、上甑島の白髪の爺さんも、年取りの晩（大晦日）には実体が家に来ると説明している。下甑島ではトシドンが実際に来るのに対し、上甑島では「白髪の爺さん」が便所まで来ていると説明される。トシドンは仮装した実体が来訪して子どもに注意して脅すが、上甑島では「白髪の爺さん」が実際に便所まで来ていると説明して子どもを便所に行かせないようにして脅す。昔は汲み取り式便所だったので、子どもたちにとって夜の便所の穴は暗くて怖い。その穴に白髪のおじいさんがいると聞かされると、その恐怖は尋常ではなかったであろう。便所の穴に「白髪の爺さん」がいるという説明は、子どもたちに「恐怖感を抱かせる工夫」とみられ、トシドンの「恐怖感を抱かせる工夫」（仮装、首切れ馬、鈴の音等）と共通している。

小川三郎氏は『甑島』の「里村とトシトイジイサン」の項で「里村では大晦日の夜、子どもたちが寝ている間に、ひそかに「餅と年玉」を白紙につつんで寝床の中に入れおく。／元日の朝になって、子どもが目を覚ますと「昨夜、ト

シトイジイサンが来てお前に年をくれたのだ」といわれる。／筆者にも幼いころの思い出がある。今はこの行事も行われていないようである。」[59] と述べている。小川三郎氏は昭和四年に上甑島里村で生まれているから、桜田勝徳氏が甑島で調査した昭和八年時には四歳であり、小川氏の子ども時代の記憶は桜田氏が調査した頃と同時期のものといえる。このことから、上甑島里村では、大晦日に来る歳神を「白髪（しが）の爺（おい）さん」とも「トシトイジイサン」とも呼称したことがわかる。

トシトイジイサン（年取爺さん）とトシドン（年殿）は共に「年神」で、子どもたちに「餅」と「年」をくれる。先に、〈事例11〉「青瀬のトシドンと餅」で、昭和七年生まれの話者が、トシドンが来た時には餅をもらわなかったが、元朝起きると枕元に小さい餅が置いてあり、親から「トシドンさんが置いて行きよったよ。言うこと聞かんとあかんで」と言われたという事例から、トシドンでも元旦に餅が置いてある場合があったらしいことをみた。かつては下甑島も上甑島と同様に、元旦起きると枕元に小さい餅が置いてあり「年神」さんが置いていったよと親が説明していた頃があったのかも知れない。

下甑島のトシドン（年殿）と上甑島のトシトイジイサン（年取爺さん）のどちらが古い形であったのかはわからないが、【年餅・年をくれる】【島・山に降臨して観察】【大晦日に実体来訪と説明】という共通項があることから考えると、次のような二つの経過をたどったと考えるのが妥当かもしれない。

一、上甑島でも下甑島でも、古い時代には、年神様が大晦日頃に天から近くの山や島に下りてきて見ており、大晦日に来訪して年餅・年をくれると子どもたちに「説明」していた。

二、いつの頃か、下甑島で、年神様の「実体（トシドン）」が大晦日に来訪して年餅・年をくれるように変更された。

仮に上甑島のトシトイジイサンが古い形であったなら、下甑島のトシドンは、語りの中だけにあった年神様を実体化させ、恐ろしい姿に仮装させ、さらに「首切れ馬」に乗ってくるという情報を追加して、より「恐怖感を高める工夫」をしていったことになるが、詳細は不明である。

ここで考えておく必要があるのが、呼称の問題である。この来訪神に関して、上甑島では「白髪（しが）の爺（おい）さん」「トシトイジイサン」、下甑島では「トシドン」と呼称されているわけであるが、下甑島では昔からずっと「トシドン」と呼ばれていたのであろうか。

先に、かつて下甑島から集団移住した種子島と屋久島で、トシドンと類似した来訪神行事があることについて触れた。『中種子町郷土誌』によると、台風や干ばつによって生活が困窮したため、下甑島から種子島へ、明治十九年に三〇九戸・一三八〇人、明治二十年に一二六戸・五六二人が移住したという記録があり、記録に残っていないものを含めると約六〇〇戸・二四〇〇人ほどが移住して全島に配されたという[60]。このため、種子島の各地で下甑島のトシドンが行われるようになったらしいが、若者や子どもの減少によって一時途絶え、野木平集落と鞍勇集落で復活したという[61]。種子島では「トシトイドン」と呼称されており、内容は、大晦日に首切れ馬に乗って天上から下りてきて、恐ろしいメンをつけて子どもたちをいましめ、大きな餅を与えるというもので[62]、下甑島のトシドンと同様である。

屋久島では宮之浦だけに伝えられており、内容は下甑島のトシドンと同様で、「トシジイサン」[63]「トイノカンサマ」[64]「トシノカミ」[65]「トシトイドン」[66]などと呼称されているという。下甑島から屋久島への移住とトシトイドンについて、小野重朗氏は「下甑から屋久島に集団移住したことがわかっているから、その人々が携えて行った民俗かも知れない」[67] と述べ、『屋久島町郷土誌』はトシトイドンは「屋久島では宮之浦だけに出現し、古い文化の残る屋久町の集落で見られないのは、その民俗が消えたのではなく、宮之浦のものがわりあい新しいという見方もできよう。いつごろ伝来したものかわからないが、甑島あたりから維新前に入ったものであろうか」[68] と述べている。このことから、屋久島宮之浦の来訪神は、江戸時代末期から明治十九～二十年の大移住期にかけて、下甑島の人々の移住とともに移植された可能性が高いように思われる。

下甑島から渡った来訪神は、種子島では「トシトイドン」、屋久島宮之浦では「トシジイサン」「トイノカンサマ」「トシノカミ」「トシトイドン」などの多様な呼ばれ方がなされているが、これらは、移住元の下甑島の各集落でそのように呼称されていたと推定してよいのではないだろうか。つまり、下甑島の移住者が移住した頃、この来訪神を、ある集落では「トシジイサン」、別の集落では「トイノカンサマ」、別の集落では「トシノカミ」、別の集落では「トシトイドン」などと呼んでおり、その呼称がそのまま種子島や屋久島に移植されたとみてよいのではないかということである。そして、移住先の種子島や屋久島では移住時の呼称がそのまま残ったが、元の下甑島では、時代とともに影響力の強い地区（手打のような）の呼称「トシドン」が広まり、やがて「トシドン」に統一されていったと推定することも可能のように思われる（戦後各地のトシドンが手打の鼻高面に変更されていったことも傍証になる）。

これらの呼称を整理すると、以下のようになる。

上甑島……「トシトイジイサン（年取爺さん）」「白髪の爺さん」

下甑島……「トシドン（年殿）」

種子島(元下甑)……「トシトイドン（年取殿）」

屋久島(元下甑)……「トシジイサン（年爺さん）」「トシ

トイドン（年取殿）」「トシノカミ（年の神）」
「トイノカンサマ（年の神様）」

この呼称の問題から、明治二十年以前の下甑島には、上甑島の「トシトイジイサン（年取爺さん）」系の呼称があったらしいことがうかがえ、古くには大晦日に来訪神がきて年餅・年をくれると子どもたちに「説明」していた頃があった可能性があるように思われる。このことから、先ほど推定した、【一、上甑島でも下甑島でも、古い時代には、年神様が大晦日頃に天から近くの山や島に下りてきて見ており、大晦日に来訪して年餅・年をくれると子どもたちに「説明」していた。】【二、いつの頃か、下甑島で、年神様の「実体（トシドン）」が大晦日に来訪して年餅・年をくれるように変更された。】という経過仮説が成立する蓋然性は高いのではないかと思われる。

結　語

以上で、甑島に伝えられてきたトシドン伝説とトシドンをめぐる諸問題に関する筆者なりの考察を終えることとする。

下甑島にはトシドン伝説が各地に伝承されている。下甑島のトシドン（年殿）は「年神様」で、天から首切れ馬に乗って集落近くの山や瀬に下りてきて観察し、大晦日の夜に来訪して子どもたちに「年餅」と「年」をくれる。

来訪神トシドンの伝説がいつから伝承されてきたのかはよくわからないが、江戸時代に瀬々野浦集落からの移住者によって開かれたとされる内川内集落にもトシドンが行われていたことや、明治二十年頃に下甑島から移住した人たちが種子島でもトシドンを行っていることなどから、少なくとも江戸時代から伝承されてきたらしいことがわかる。

実体として来訪するトシドンの姿は、時代と共に変化していったらしい。古い時代のトシドンは、瀬々野浦・青瀬・内川内・薗牟田の古老が語ってくれたように、顔を手ぬぐいのようなもので隠したり顔に何かを塗ったりし、ミノ（蓑）や山着（野良着）のようなものを着て訪れたと推定される。その後、手打のように段ボールなどで手作りの面のようなものを作って顔を隠すようになり（終了後子らに見られないように焼却）、さらには鬼の面のようなものを購入して保存会などで管理する時代になってきたらしいことがわかる。時代が下るにつれ、一部の地域で行われていたものが取り入れられて、変化していった様子がうかがえる（餅を手渡していたところが餅を背中に乗せるようになる、手ぬぐいのようなもので顔を隠していたところが鼻の高い面をかぶるようになる等）。

第二次世界大戦後、下甑島のトシドンは一時中断していた時期があったそうだが、戦後復活したという。トシドンは国の重要無形民俗文化財に指定されたが、文化財に指定された経緯やトシドン復活の経緯についての古老の語りも文化史的に意義深いものがある。

なぜトシドンが首切れ馬に乗って天から下りてくると伝承されているのかは不明であるが、上甑島に伝わる天馬の伝説や、琉球文化圏の神役と天馬の語りなどとからめて多角的に検討してみる必要があるように思われる。また、トシドンが「首切れ馬」に乗ってやってくるとされるのは、子どもたちを怖がらせて良い子にしつけるために後代に付加されたものではないかと推定される。

トシドンが下りてくるところは、集落近くの山（岩、瀬の場合もある）とされており、各地で異なる。青瀬のツーメ、瀬々野浦のトシドン石、手打港の馬乗瀬など、下りてくるとされる地点に重要な意味があるところもあり、下りてくる場所についても注目される。

上甑島にはかつて「トシトイジイサン（年取爺さん）」の伝承があったとされる。また、明治二十年以前の下甑島からの移住者が伝えた来訪神名に、種子島(元下甑島)では「トシトイドン（年取殿）」、屋久島(元下甑島)では「トシジイサン（年爺さん）」「トシトイドン（年取殿）」など、上甑島の「トシトイジイサン（年取爺さん）」系の呼称があったらしいことがうかがえ、古い時代の下甑島には大晦日に来訪神（年取爺さん系）がきて年餅・年をくれると子どもたちに「説明」していた頃があった可能性があるように思われる。下甑島のトシドン（年殿）と上甑島のトシトイジイサンのどちらが古い形であったのかはわからないが、【年餅・年をくれる】【島・山に降臨して観察】【大晦日に実体来訪と説明】という共通項があることから考えると、古い時代には上甑島・下甑島共に、年神様が大晦日頃に天から近くの山や島に下りてきて見ており、大晦日に来訪して年餅・年をくれると子どもたちに「説明」していたが、いつの頃か下甑島で年神様の「実体（トシドン）」が仮装して大晦日に来訪して年餅・年をくれるように変更され、さらに「首切れ馬」に乗ってくる等の情報を追加してより「恐怖感を高める工夫」をしていったという経過をたどったと考えることも可能かもしれない。

下甑島のトシドンも、上甑島のトシトイジイサンも、共に子どもたちに年餅を渡した。飽食の時代である現代と異なり、厳しい環境の中で収穫された貴重な米で作成された餅は、昔の子どもたちにとって極めて大きな価値を持つ、年神様からもらった魅力的なお年玉だったであろう。その感謝の気持ちが、子どもたちのしつけに良い効果をもたらしたと思われる。トシドン行事には大きな教育的な効果があると土地の人たちが考えて、一時中断しても復活されたことには、深い意味があったことがわかる。

各地の来訪神は多様な問題を含んでおり、各来訪神の性質の解明は難しい。祭事説明伝説の問題や他地域の来訪神に関する問題など、残された諸問題については、別稿で検討することとしたい。

注・文献

〔なお、本稿の諸資料よりの引用文中、旧漢字・異体字は原則として通行の字体に改めた。〕

1）原田信之「鹿児島県甑列島の自然説明伝説」（「新見公立大学紀要四一」二〇二〇年一二月）参照。

2）下甑村教育委員会編「昭和５２年５月１７日　国指定重要無形民俗文化財　甑島のトシドンの解説」（鹿児島県下甑村教育委員会・甑島のトシドン保存会、一九七九年三月）。なお、この冊子全文は『下甑村郷土誌』（下甑村、二〇〇四）に転載されている（九四五～九五七頁）。

3）文化庁ホームページ「ユネスコ無形文化遺産「来訪神：仮面・仮装の神々」認定書伝達式の開催について」https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1416874.html〔2021.8.アクセス〕

4）注２に同じ。

5）『鹿児島県の地名』（平凡社）、「甑島郷」の項に「なお不作不漁のため、明治一九年と翌年に下甑島の住民を中心に当地から種子島への集団移住があった。その総計は戸数四三五・人数一千九四二であった」とあり、同書「総論」の〔年中行事〕の項に「年越しの晩、甑島と種子島・屋久島の一部にはトシドンとよばれる珍しい来訪神行事があり、面を被って顔を隠した青年たちが子供のいる家々を訪れる。」とある。『下甑村郷土誌』（下甑村、二〇〇四）第四編第三章第一節「種子島移住」の項。小野重朗氏は「屋久島の宮之浦部落でもトシジイサンといってよく似た行事があるが、下甑から屋久島に集団移住したことがわかっているから、その人々が携えて行った民俗かも知れない」（同氏『南日本の民俗文化Ｖ薩隅民俗誌』第一書房、一九九四、「甑島の民俗ー鹿児島県薩摩郡ー」、四五六～四五七頁）と述べ、下野敏見氏は「トシドンは種子島にも出現します。甑島が旱魃にやられ、明治一九年に主に下甑島の手打から耕地の広い種子島へ集団移住しました。以来、種子島の甑島系集落にトシドンが根づき、今も続いているのです」（同氏『南日本の民俗文化誌１２』南方新社、二〇一〇、第一部第一章「南から見るトシドンと仮面来訪神」、一五～一六頁）と述べている。

6）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町手打麓の橋口義民氏（大正十五年生まれ）。平成二十七年（二〇一五）八月十日・原田調査、採集稿。記録を残す必要性から実名とした。

7）なお、ここの三大行事とは、八月一日の八朔稚児（男児が相撲などの行事を行う）、八月十五日の十五夜節供（稚児の寄せ相撲等）、十二月三十一日のトシドンという子どもの三大行事を指しているかと思われる。『下甑村郷土誌』（下甑村、一九七七）、第二編第五章第一節「年中行事暦」、四五二～四五三頁参照。

8）原田信之「沖縄県伊平屋島の海神祭伝説」（「新見公立大学紀要三九」二〇一八年一二月）参照。

9）原田信之「沖縄県伊平屋列島のウンジャミ・シヌグ伝承」（「新見公立大学紀要四〇」二〇一九年一二月）参照。

10）桜井徳太郎氏『沖縄のシャマニズム』（弘文堂、一九七三）、山下欣一氏『奄美のシャーマニズム』（弘文堂、一九七七）、他。

11）話者と調査日は注６に同じ。注２の「昭和５２年５月１７日　国指定重要無形民俗文化財　甑島のトシドンの解説」（鹿児島県下甑村教育委員会・甑島のトシドン保存会、一九七九年三月）の「あとがき」に「社会教育課長／橋口義民」とあるので、橋口氏は下甑村職員として外部との連絡調整にあたったことがわかる。氏は後、下甑村議会議員を務めた（『下甑村郷土誌』下甑村、二〇〇四）。

12）下重暁子氏は昭和四十三（一九六八）年にＮＨＫを退社してフリーアナウンサー、作家になっている。甑島に来たのが昭和四十八年だったかは不明。

13）ＮＨＫアーカイブス、番組表検索結果によると、ＮＨＫ『ゆく年くる年』は、昭和三十（一九五五）年から開始された年末年始を紹介する番組で、毎年十二月三十一日午後十一時四十五分～一月一日午前〇時四十分まで放送される。昭和五十三（一九七八）年十二月三十一日午後十一時四十五分～昭和五十四年一月一日午前〇時四十分の『ゆく年くる年』番組内で「（鹿児島）「甑の歳どん」～鹿児島県・甑島～」」が放送された。https://www.nhk.or.jp/archives/[2021.8.アクセス]

14）『下甑村郷土誌』（下甑村、二〇〇四）、「トシドン行事の調査経緯及び保存状況」、九四五頁。

15）下野敏見氏『南日本の民俗文化誌１２』（南方新社、二〇一〇）第一部第一章「南から見るトシドンと仮面来訪神」内「石原慎太郎氏とボゼ」の項に「氏がまだ都知事になるずっと前のある年、トカラ列島は悪石島にやってきました。得意のヨットに乗って、奄美大島から本土の方に北上し、途中、悪石島に寄港されたのです。暑い夏の日でした。（中略）「石原慎太郎氏がボゼを見せてくれと言われるが、どうしたものだろうか」と、私に相談です。（中略）すると、区長は黙って去り、海岸の方に行きました。そして、一時間位して、また、やって来ました。「慎太郎氏には見せられないと言った。ヨットは北上して行った」ということです。」（二五～二六頁）と記されている。

16）桜田勝徳氏「ー今は昔思い出の採訪日記ー甑島遊記（一）～（六）」（「民間伝承」秋田書店、（一）…一七（五）・一九五三年五月、（二）…一七（七）・一九五三年七月、（三）…一七（八）・一九五三年八月、（四）

…一八（一）・一九五四年一月、（五）…一八（四）・一九五四年四月、（六）…一八（七）・一九五四年七月）。

17）注16の桜田勝徳氏「ー今は昔思い出の採訪日記ー甑島遊記（五）」（「民間伝承」、一八（四）、一九五四年四月）。

18）注16の桜田勝徳氏「ー今は昔思い出の採訪日記ー甑島遊記（四）」（「民間伝承」、一八（一）、一九五四年一月）。

19）『下甑村郷土誌』（下甑村、二〇〇四）、手打地区の「年中行事」の項、一二〇四頁。なお、旧版『下甑村郷土誌』（下甑村、一九七七）、第二編第五章第一節「年中行事暦」、一月十四日の項には「孕み節供ーヘグロを顔に塗った青年や子供が、タラの木の棒を持って「ヨメジョウダーセ」「オーカタダーセ」「メッチョウダセ」「ハーラメダセ」等部落によって違った呼びかたで、花嫁の家を訪れ、「ださんというと鍋も釜もたまらんど。」といってまわる。」（四五〇頁）とある。

20）『日本民俗大辞典　上』（吉川弘文館、一九九九）、「祝い棒」の項。

21）『改訂綜合日本民俗語彙』（平凡社、一九五六）、「モウソウダシャレ」の項。

22）中沢新一氏「斬り殺された異人ー通底器としてのフォークロアー」（『日本昔話研究集成１　昔話研究の課題』名著出版、一九八五、に再録）。

23）小野重朗氏「甑島の民俗ー鹿児島県薩摩郡ー」（同氏『南日本の民俗文化Ⅴ　薩隅民俗誌』第一書房、一九九四、四五六頁）。

24）下野敏見氏「南日本のカミの出現ーボジェ・メン・トシドンー」（『まつりと芸能の研究　第１集』錦正社、一九八二、所収）。

25）土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二一話トシドン（鹿児島県下甑島）後編」（「しま」日本離島センター、六〇（二）通号二三九、二〇一四年九月）。

26）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町瀬々野浦の男性（昭和二十四年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月七日・原田調査、採集稿。

27）注１の原田信之「鹿児島県甑列島の自然説明伝説」参照。

28）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町瀬々野浦の男性（昭和二十三年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月八日・原田調査、採集稿。

29）土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二〇話トシドン（鹿児島県下甑島）中編」（「しま」日本離島センター、六〇（一）通号二三八、二〇一四年七月）。

30）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町片野浦浜田の男性（昭和十五年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月八日・原田調査、採集稿。

31）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町片野浦浜田の女性（昭和四年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月八日・原田調査、採集稿。

32）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町片野浦浜田の男性（昭和二十二年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月八日・原田調査、採集稿。

33）注２に同じ。

34）話者と調査日は注６に同じ。

35）注29の土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二〇話トシドン（鹿児島県下甑島）中編」、土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第一九話トシドン（鹿児島県下甑島）前編」（「しま」日本離島センター、五九（四）通号二三七、二〇一四年四月）。

36）永吉慶子氏「「トシドン」の伝承形態」（「伝承文化研究」五、二〇〇六年三月）。

37）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町手打麓の男性（昭和十四年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月十日・原田調査、採集稿。

38）注29の土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二〇話トシドン（鹿児島県下甑島）中編」。

39）注２に同じ。

40）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町青瀬の男性（昭和七年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月十日・原田調査、採集稿。

41）注29の土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二〇話トシドン（鹿児島県下甑島）中編」。

42）話者と調査日は注40に同じ。

43）注29の土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二〇話トシドン（鹿児島県下甑島）中編」。

44）話者は鹿児島県薩摩川内市下甑町瀬々野浦内川内の男性（昭和八年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月九日・原田調査、採集稿。

45）『鹿児島県の地名』（平凡社）「瀬々野浦村」の項に「「伊能忠敬測量日記」には内ノ河内（現内川内）の人家二〇軒余とある。内ノ河内は北方に位置する支村で、本村からの移住者が尾岳（おたけ）連峰の中腹を開拓して住着いたという」とある。伊能忠敬は文化七年八月に甑島に渡って実測した（藤田元春氏『伊能忠敬の測量日記』日本放送出版協会、一九四一、九三頁）。「伊能忠敬測量日記」文化七年八月一六日の条に「内ノ河内（人家二十余軒）を過」（鹿児島県史料集（Ｘ）『伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説』鹿児島県立図書館、一九七〇、一九頁）とある。

46）『下甑村郷土誌』（下甑村、二〇〇四）、「下甑村立内川内小学校」の項、八六二頁。

47）注25の土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二一話トシドン（鹿児島県下甑島）後編」参照。

48）話者は鹿児島県薩摩川内市鹿島町藺牟田の女性（大正七年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月九日・原

田調査、採集稿。

49）話者は鹿児島県薩摩川内市鹿島町藺牟田の男性（昭和七年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月九日・原田調査、採集稿。

50）注25の土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二一話トシドン（鹿児島県下甑島）後編」に、「鹿島のトシドンは、タッチョンウエという山やソノ山、またはそれぞれの郷に近い山におり、そこから子どもの言動をいつも見ていて、大晦日になると降りてくると伝えられています。天上界から降りてくる、首なし馬に乗ってくる、とよく言われますが、そうした謂（いわ）れが鹿島にあったかどうかはわかりません。餅を背中に乗せる地域もありますが、鹿島のトシドンは、ただ手渡しで餅を渡すだけでした。いまでは、鹿島でも背中に餅を乗せるようになりました。いろいろなものが入ってきて、変わってきたんではないですかね。」とある。

51）注25の土屋久氏「聞き書き島の精神文化誌第二一話トシドン（鹿児島県下甑島）後編」参照。

52）話者は鹿児島県薩摩川内市上甑町桑之浦の男性（昭和三十五年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月十三日・原田調査、採集稿。

53）話者は鹿児島県薩摩川内市上甑町桑之浦の女性（昭和七年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月十三日・原田調査、採集稿。

54）話者は鹿児島県薩摩川内市上甑町桑之浦の男性（昭和十九年生まれ）。平成二十七（二〇一五）年八月十三日・原田調査、採集稿。

55）話者は鹿児島県大島郡大和村今里の女性（昭和四年生まれ）。平成二十八（二〇一六）年八月十一日・原田調査、採集稿。今里のノロ祭祀については『大和村誌』（大和村、二〇一〇）参照。

56）原田信之「沖縄県伊平屋島の海神祭伝説」（「新見公立大学紀要」三九、二〇一八年一二月）。

57）永吉慶子氏「「トシドン」と首なし馬伝承」（「昔話伝説研究」二五、二〇〇五年五月）。

58）注16の桜田勝徳氏「ー今は昔思い出の採訪日記ー甑島遊記（二）」（「民間伝承」、一七（七）、一九五三年七月）。

59）小川三郎氏『甑島』（春苑堂出版、二〇〇一）、一一八～一一九頁。

60）『中種子町郷土史』（中種子町、一九七一）、「移民」の項、一八一～一八二頁。

61）『明治期の種子島移住史』（西之表市教育委員会、二〇一八）、一五頁。

62）宇都博一氏「年中行事（トシトイドンを中心として）」（『西之表市の民俗・民具　第１集』西之表市教育委員会、一九九七）。

63）小野重朗氏『南日本の民俗文化Ⅴ　薩隅民俗誌』（第一書房、一九九四）、四五六頁。

64）『上屋久町の民俗』（上屋久町教育委員会、一九九二）、三五〇頁。

65）『上屋久町郷土誌』（上屋久町教育委員会、一九八四）、八八四頁。

66）『屋久町郷土誌第四巻』（屋久町教育委員会、二〇〇七）、八五一頁。

67）注63に同じ。

68）注66に同じ。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会令和三年度～六年度科学研究費・基盤研究Ｃ・課題番号21K00285の成果の一部である。